
ないとof騎士

璃瑠@星風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ないとOf騎士

【Nコード】

N7353R

【作者名】

璃瑠@星風

【あらすじ】

どこかの偉い学者を父親に持った主人公。
人と接するのが苦手な彼は父親の再婚相手の家に住むことに。
そこにはかなり可愛い部類に入る三姉妹がいて――――。
日常と非日常が混じり合うとき、彼と彼女たちはどう変化していくのか。

なんて感じの学園ラブコメ的な何か

第一話 厄介な頼みごと（前書き）

お久しぶりの投稿です。まあ、バイトバイトの生活にも慣れてきたのでなんか書こうかなあと思い書いてみました。相変わらずの低クオリティですが、今回こそ完全なる完結を目指して頑張りたいです！

第一話 厄介な頼みごと

血の繋がらない姉や妹ってのに、憧れを感じたことはあるだろうか？

俺はないと断言できる。

理由？俺が実際に体験してるからだ。血の繋がらない姉と妹。それに俺と同じ年のアイツも含めて三姉妹との同居生活。

まあ、初めて会った時にワクテカしなかったと言えは嘘になる。

約一年前、高校一年生という思春期真っ盛りの俺は、それはもうはしゃいでいたさ。

そんな昔の俺に長々と説教してやりたい。

世の中、そう上手くはいかないと。

☆☆☆☆

朝飯の食パンをくわえながら玄関の戸締まりを確認する。

最後に家を出るのはいつの間にか習慣になっていた。

母さんは、俺の記憶がまだ曖昧な頃に死んだ。交通事故だったそう
だ。

ま、人ってのはいつかは死ぬんだし、今は特に何も思っていない。

父さんが再婚をすると申し出てきたのは、俺が中学を卒業して、決
まっていた高校に入学する前日のことだった。

突然のことにため息は出るも、父さんが急に何かを言い出すのは今
に始まったことではないので特に驚きはなかった。

再婚相手の名前は相良 愛＞さから あい＜さん。

父さんにはもったいないくらい美人で、知り合ったのはどっかの

国の遺跡を調査してる時だったとか何とか。

詳しい話は100%がのろけなので割愛させてもらおう。

とりあえず再婚は新幹線のごときスピードで決まり、愛さんもバツイチだったらしく子供が三人いるという。

父さんはどっかの研究所の偉い学者さんで、しょっちゅう海外に行ってたんだが、愛さんも学者さんらしく、二人でハネムーン世界遺産巡りをするとか言って、さっさと海外に行っちゃまいがった。

残された俺は、父さんから『愛さんの子供さんはみんな女の子だ。俺とマイスイートハニー（死語）が帰ってくるまでしっかり守ってやるんだぞ?』とかいう伝言をもらい、馴染みの土地から泣く泣くおさらばして愛さんの家に引っ越しをすることになった。

もちろん、決まっていた高校は蹴って、愛さんの家の近くの高校を受験。ギリギリで編入試験に合格した。

まあ、これから愛さんの子供たちと一緒に住むわけだし。血の繋がらない姉妹ときゃつきやうふな展開を期待しながら、引っ越し先に着いて家の玄関をあけると、そこには三人の女の子が。

待っていてくれたのかな?と期待しつつ、あまり得意ではないコミ

ユニケーションをとろうとして————黒髪の長い美人。

確か、長女の相良 志穂>さがら しほくさんだったか。写真で見たのより数倍可愛いな、なんて思っていると、彼女からズビシッと指を指されて思わず後ずさる。

「しゃべらないで」

美人の見た目と違って、まるでアニメか何かのキャラみたいな可愛い声はその口から発せられる。

「アンタの部屋は一階の奥。トイレはそこ。キッチンとかはそっち。お風呂はあそこ」

次々と発せられる言葉に戸惑いつつ、なんとかトイレとかの場所を覚える。

「二階は私たちの部屋があるから————絶対に上がってこないで」

へ？と戸惑いつつも志穂さんの目を見る。そこには、あきらかな拒絶があった。

「私たちは他人。食事も、洗濯も全部別々。会話は必要最低限でね」

そんなこんなで俺の新たな生活が始まった。

実質一人暮らしになってしまったわけだが、一人暮らしには慣れているわけで。特にラッキースケベな展開などもなく、早くも一年が過ぎた。

自慢じゃないが友達を作るのは苦手だ。二学年に進級した今でも、友達は一人もいない。

ま、俺みたいな根暗なヤツに話しかけてくるのはただの物好きかとてもなく人当たりがいい、いい子ちゃん、だけだろうがな。

「あ、あのっ！」

学校の校門が見えたあたりで、誰かに声をかけられた。

俺は目を隠すくらいまで伸びた前髪の隙間から相手をうかがう。

そこに居たのは見たこともない女の子だった。特徴的なのは、頭の

てっぺんあたりから生えている、所謂アホ毛と呼ばれるもの。

風に揺れるそのアホ毛を目で追っていると、女の子がいきなり俺の手をつかんできた。

「ついてきてくださいっ！」

両手で、俺の鞆を持っていない方の手をつかんできた女の子は、必死に俺を引っ張る。

制服の胸のあたりにあるリボンの色から察するに、新入生か……。

何か用でも？と質問しようとしたところで、周りから注目されていることに気づいた。

俺は目立つのが嫌いだ。だって、恥ずかしいじゃん。

つまり、俺がとった行動は一つ。女の子に引かれるがまま、着いていくこと。

女の子は校舎の中には入らず、そのまま不良たちがたまりそうな校

舎裏に足を運んだ。

そこで、先に待っていたのか、にやにやと笑いながら右手を振る人物が視界に入った途端、とても嫌な予感がした。

予感、というか十中八九何かがあるんだろう。

コイツに会うたびに厄介事に巻き込まれるってのは、パターン化しつつある。

「またお前か・・・」

俺がため息まじりに息をはくと、男は小さく苦笑した。

「いやだなあ、まるで僕に会うと不幸が訪れるみたいな顔。もっと気楽に話しましょうよ、雅君＞まさくん＜」

「雅君言うなって言ってるだろうが・・・」

不機嫌そうな態度をとる俺に構わず、相変わらずのイケメンスマイルを振りまいているコイツの名前は坂上 尋＞さかうえ ひろく。

何度突き放しても絡んでくる、変わり者だ。

まあ、たまたま共通点があって知り合ったのだが・・・コイツの隣を歩いていると目立ってしょうがない。なんたってイケメンだから。

こうやって校舎裏に呼び出してもらったのはありがたいけど、むしろ関わらないでほしかった。永遠に。

「で、その子は？」

尋の隣に立って俺の方をキラキラした目で見ている女の子を指しながら質問する。

「ああ。この子は・・・」

「あのあのっ！初めまして！私の名前、坂上 瑞希＞さかうえ みずきくって言います！雅君先輩のことはお兄ちゃんからいっぱい聞いてて」

「・・・妹？」

尋に視線を向けると、尋は小さくうなずいた。

「全然似てないですけどね。僕と違って瑞希は、正直に生きてますから」

どこか悲しそうな表情を見せる尋。

女子どもがいたらキャーキャー騒がれるレベルの代物だな。……イケメン滅びろ。

「んで、こんなところに妹を使ってまで呼び出したワケを聞かせてもらっても？」

「ええ。まあ。頼みといえますか……。頼れる人が雅君しかないのです」

そう言って尋は、耳を覆っている部分の髪を掻き分けて十字架を象ったシンプルなピアスを見せてきた。

「神の遺物＞ジャンク＜か」

それは神の遺物、通称ジャンクと呼ばれるものだ。

なんでジャンク、つまりゴミ屑なんて名称になったのかは知らないが、尋はコレの事を神の遺物と呼んでる。

確かに秘められた力は規格外。科学では解明できないような不思議な力が宿っている。神が残した奇跡の道具なんて語っていた尋の意見は間違っていないだろうな。

「もしかして尋の妹さんも持ってるのか？」

「ええ。何の因果か、兄妹そろって」

そう言われて妹さんの方を見ると、恥ずかしそうに左手の中指にはめられている銀色の指輪を見せてきた。

「僕は能力的に、人に何かを教える事なんて出来ませんし……
どうかお願いします」

初めて見る尋の謙虚な態度に戸惑いつつ、渋々と頷いてやった。

ま、なんていうかコイツの事少しは仲間なんて思ってるわけだし。
いや、言っとくが友達の一步手前レベルな。

「ま、しゃーなしだな」

そう言うのと爽やかイケメンスマイルでにこやかに笑う尋。

「雅君ならきつと、そう言ってくれると思ってましたよ」

「んで、妹さんは何番なんだ？」

俺たちが持つ神の遺物＞ジャンク＜は、世界中に十二個存在している。

これは父さんが言ってたので間違いはないと思う。

それぞれの能力はわからないし、何の目的でこんなものが存在しているのかもわからないけど、まあ、そのうち父さんがそれらを調べて教えてくれるだろ。

尋の能力は、拒絶。

ありとあらゆるモノを拒絶する力だ。なんてチート。イケメンにチート能力与えて、本当、世の中は不公平だよな。

それぞれの神の遺物＞ジャンク＜には正式名称があり、尋が持っているピアスは八番目の騎士＞knight of eight＜と呼ばれている。誰がそう呼び始めたかは知らないが、父さんがそう言ってたのだから仕方ない。

確か指輪の神の遺物＞ジャンク＜は……。

「終わりの騎士＞knight of end＜か」

十二番目の神の遺物＞ジャンク＜。同じ、神の遺物を使う者＞ジャンクコレクター＜としてどんな力なのか気になる。

「本人もまだ能力の発現はしてないようですし、頼みましたよ雅君」

「まあ、教えられる事ってあんまりないんだけどな」

そこで朝のHRが始まる五分前を告げるチャイムの音になった。

先ほどから大人しく俺と尋の会話を聞いていた、妹さんに笑いかける。

「つてわけでよろしくな、尋の妹さん」

人と接するのは苦手だが、嫌いじゃない。尋の頼みってのは少し癪だが、気軽にしゃべれる人が増えるってのはいいことだな。

「はい！こちらこそよろしくお願いしますっ！」

彼女の元気な声に、俺と尋は顔を見合わせて苦笑した。

第一話 厄介な頼みごと（後書き）

作者は英語が苦手です。これからちよくちよく英語の何かしらが出てくると思いますが、間違っている可能性大なので、そんなところは指摘してくださいとありがたいですね。それではまた次回のし

第二話 騎士の安息所

俺と尋は同じクラスだ。

二年C組。なぜかこのクラスには個性的なヤツが多い。

担任に至っては見た目幼女、実年齢十五歳の天才少女だからな。

こんな個性豊かなクラスの中で、俺という存在はかなり影が薄い。
いや、ありがたいね本当。

尋はイケメンという特徴を持つてはいるが、残念ながらクラスの中では普通の生徒。頭に超とかつかないとこのクラスで目立つなんてのは無理だろう。

つまらない授業を聞き流し、ぼうつとしながら視線をさまよわせていると、一人の女の子と目が合った。

ソイツは俺を睨むと、黒板へと視線を戻す。

いつものことだし、いまさら何かを思うなんてことはない。彼女の

名前は相良 奈留＞さがら なるく。一応戸籍上は家族ということになっている。

何の恨みがあるかは知らないが、毎日のように睨まれるのはさすがにだるい。

「相変わらずですね」

教室の一番左端の一番後ろの席という好ポジションが俺の席。その右隣に座っているのは尋だ。

ノートと黒板を交互に見ながらペンを動かしつつ苦笑する尋。器用なヤツ。

「まあ、うちの家族は俺のことが相当に嫌いらしいからな。仕方ないっちゃ仕方ない」

「しかし、雅君は何もしてないんでしょ？さすがに理不尽だと僕は思いますけど」

「さてね。知らないうちに何かしたのかもしれないし」

「どうせなら僕の家族にでもなりませんか？家に帰っても雅君をいじれる。考えただけで楽しそうです」

「死ね。つか俺が精神的に死ぬわ」

何気ない会話。こういうのが出来る相手って、友達って呼んでいいのだろうか？・・・ま、友達云々の前に俺と尋はライバルだからな。

もっともっと強くなって、いつかはあの人に認めてもらう。それが俺と尋の共通点であり、俺と尋の絆。

「今日の授業はここまで」

先生の声とともに、静かだった教室に声が溢れる。

平凡でこれといって特に目立つ特徴を持っていない数学の教師は、そそくさと教室を出て行った。

俺は一つ欠伸をすると、次の時間もこれといって特徴のない歴史の先生だということを尋に確認し、夢の中へとダイブした。

☆☆☆☆

放課後。部活生はさっさと部室に行き、帰宅部の連中は帰りにどこに寄ろうかと話し合っている。

そんな教室を小さく欠伸をしながら後にした俺は、いつものごとくとある教室に向かう。

尋のヤツは日直だから少し遅れてくるだろう。

B棟。通称文化部棟と呼ばれている校舎がある。

学生の教室とかがあるA棟から渡り廊下をつないで建っている校舎で、通称の通り、主な役目は文化部の部室をまとめている校舎だ。

うちの学校はかなり自由な校風で、同好会にすら部室を与えるほどの優遇っぷり。

俺がこの同好会を作った主な理由はただの時間つぶし。

家で三姉妹と遭遇しないように、遅く帰るための休息場所がほしかったからである。

まあ、尋と会ってなければこんな同好会を作ろうなんて思いもしなかっただろうけど。

文化部棟の一階の一番奥の教室。そこが俺と尋の所属している、騎士の安息所なる謎の同好会の部室である。

ちなみに部活名を考えたのは尋だ。文句ならアイツに言ってくれ。

部室のドアを開けると、そこには尋の妹さんの姿があった。

「・・・何してんの？」

部室の中心部辺りに置かれている長机。

その各場所に4つ置いてあるパイプ椅子の一つに座りながら、何か本を読んでいた尋の妹さんは、本から顔を上げると、はわわっと慌てて立ち上がった。

「こ、こんにちわです雅君先輩！え、えっとお兄ちゃんから放課後ここに来いって言われてて、それで待っている間暇だったから勝手に座らせてもらってたのですが……だめ、だったでしょうか？」

どこか怯えた犬のような目で俺を見る尋の妹さん。

俺は苦笑しながら、尋の妹さんの正面の席に荷物を置く。

「気にしないでいいよ。あと、雅君じゃなくて別の名前で呼んでくれるとありがたいんだが」

「え……えっと」

「御代 雅哉>みしろ まさやくってのが俺の名前ね」

うーんとあごに手を当てて考える尋の妹さん。

さて、あだ名のネーミングセンスが兄に似てなきやいいんだけど。

「ま、ま、ま……」

むむむ、と唸り、ついに何かを閃いたのかポンツと手を打つ尋の妹さん。

「まーりゃん!!」

「却下」

「がーん……」

今のネーミングセンスは兄を越えたな。

まあ尋の場合、今のあだ名の元ネタを知ってるだろうから敢えて言わなかったんだろうが、元ネタも知らずそのあだ名を思いつく尋の妹には感嘆するしかないだろう。……いろんな意味で。

「な、なんでですか!？」

「詳しい理由は尋に聞け。俺から言えるのは、俺なんかはそのあだ名を付けたら全国のまーりゃんファンに失礼だって事くらいだな」

「まあーりゃんファンですか……？」

「そうだ。尋がこういうのには詳しいからな。根ほり葉ほり聞くといいさ」

くっくっく。尋の困った顔が目には浮かぶわ。

なんて悪どい笑みを浮かべていると、タイミングよく尋が部屋に入ってきた。

「おや、二人ともおそろいで」

それを見た尋の妹さんはキラキラと目を輝かせながら手を勢いよく上げた。

「お兄ちゃん、質問！」

いやあ、それからのやり取りは見えて楽しかったね。尋の困った顔といったら……くくく。

どうやらアニメ系の趣味は妹に隠していたらしい。隠し事はいかんですよ隠し事は。

「それで、俺は尋の妹さんに何を教えればいいんだ？」

ぐったりと疲れて長机に突っ伏している尋に質問する。

「……ええ。神の遺物の能力を初めて起動させるのに必要なことは、知っていますよね？」

「ん、ああ。感情の高ぶりだろ？」

最初の一回。初めて神の遺物＜ジャンク＞を起動させるには、適合者の感情の高ぶりが鍵になる。

二回目以降は意識するだけで能力の発動を出来るようになるし、大変なのは最初の一回だけだ。

「えっと……最初の一回能力を使えばいいんですか？……私、一回で覚えられる自信なんてないんですけど」

「ああ……なんて言うかな。自転車とかに一回乗れるようになったらその感覚を体が覚えてるだろ？それと同じで、一回成功させたら何となく出来るようになるから大丈夫だって」

俺がそう声をかけてあげるも、尋の妹さんはどこか不安そうな表情をしている。

「まあ、何はともあれ、一回発動してしまえばわかることなんだけど。……つか尋、妹さんの感情を高ぶらせるのはいいが、俺に出来ることって何なんだ？もちろん、いい案は考えてるんだろ？」

俺がそう質問すると、疲れ切った顔から一変。尋はグッドスマイルイヤーを受賞できそうな勢いで微笑んだ。

「ええ、もちろん」

妹さんも内容は聞かされてないのか、緊張した面持ちで唾を飲んだ。

俺はとてつもなく嫌な予感に眉をひそめる。

「いまから、雅君と瑞希は恋人同士という設定で生活してもらいます。まずは、そうですね————」

「ちょっと待て」

尋の言葉を止める。聞き間違いでなければ、俺と自分の妹を恋人同士という設定にして何かをやらかすつもりらしいな。

「……何でしょうか？不満でも？」

「不満だらけだったの！」

俺がそう怒鳴ると、尋の妹さんがビクツと身を震わせた。

「……わ、私じゃやっぱり不満ですよね。雅君先輩は私みたいな可愛くない女の子、嫌ですよね。」

結局あだ名は雅君先輩で固定なんだ……じゃなくて！

「何を言ってるんだ尋の妹さん。別にそういうわけじゃなくてだ・
・・ええとほら、俺って根暗だし友達もないし。君の方が不満
なんじゃないかって」

「私は別に、不満なんてないですっ！雅君先輩と恋人同士になりた
いですっ」

・・・くっ！なんなんだこの娘！！今の言葉は胸キュン（死語）レ
ベル32の威力だぜ・・・。

「おいおい……いいのかお兄ちゃん」

「もちろんです。僕、言いましたよね？これは雅君にしかできないことなんです」

ニヤニヤと笑いやがって。コイツ、さっきの暴露事件のこと根に持ってやがるな。

「俺にしか出来ないか？ってかむしろお前がやればいいじゃん。尋の妹さんも、俺みたいなのよりイケメンの兄ちゃんのがいいよな？」

「私とお兄ちゃんは兄弟ですよ？恋人なんてなれるはずありません」

……ちっ。尋の妹さん、ブラコンっぽいけど、常識人だな。アニメや漫画のようにはいかないかさすがに。

「だ、そうです。ちなみに、ほかの男なんてのは許しませんよ？僕が」

「……つまりお前のわがままか」

「兄として、妹を知らない男に差し出すなんてありえないでしょう？だからこれは、雅君にしか頼めないことなんです」

どうせ何を言っても聞かないんだ尋は。一応色々と反発してみたがな。

俺は大きいため息をつく、仕方ないと頷いた。

「恋人のフリするだけだからな。尋の妹さんの能力発動したら、すぐ終わりだから」

そう言うと、尋は満足げに笑った。

「ええ。期待してますよ雅君」

「よ、よろしくお願いしますです。雅君先輩……」

まったく。この兄妹には色んな意味で勝てそうにないな。

第三話 恋人ごっこ

「とりあえず、雅君は瑞希の名前を呼ぶところから始めないといけませんね」

まるで手のかかる子供を見るような目で俺を見てくる尋。

ムカつくなコイツ。

「わかってるっての。……えっと……み、瑞希ちゃん？」

「は、はいっ！」

「よ、呼んでみただけ……なんて。あはは」

女の子を下の名前で呼ぶなんていつぶりだろうか。滅茶苦茶恥ずかしい。

「いやはや、初々しいですね。僕のことはお兄様と呼んでもらってもいいですけど？」

「死ね」

まったく・・・もう疲れた。帰りたい。

「次は・・・そうですね。雅君のその前髪をどうにかしましょう」

「・・・あ？」

何をバカなことを・・・この前髪は煩わしい現実から俺を守る最後の砦でだなあ・・・。

「大丈夫ですよ。雅君って意外といい顔してますから」

「嫌みにしか聞こえないが・・・？つか嫌だ」

なんだかんだ言っても俺はこの髪型が気に入ってる。そう簡単に納得出来るはずがない。

「・・・もちろん、拒否権はないですよ？僕の計画に支障がでますから」

「計画ってなんだよ！ふざけんな！」

「ふざけてなんかいませんって。少なくとも数日以上は妹の隣を恋人として歩くんですよ？」

「ちょ！そのはさみどっから出した！」

尋は、仕方ないな、と呟くと、能力を発動させた。

「雅君が動くのを、拒絶する」

体の自由が奪われる。

神の遺物＞ジャンクくの力に抵抗できるのは、同じ神の遺物＞ジャンクくの力だけ。

俺も負けじと能力を発動させようとするも少し遅かったようだ。

パサリ、と落ちていく大事な前髪を目で追いながら。涙が出そうになるのを堪える。

尋・・・・・・・・いつか、泣かす。

☆☆☆☆

「似合ってますよ、雅君先輩！」

床に散った自分の髪を手で掴みながら落ち込んでいると。尋の妹さん・・・・・・・・じゃなかった。瑞希ちゃんの声が聞こえてくる。

視線だけを動かして見た瑞希ちゃん表情は、嘘を言っているようには見えず、少しだけ気持ちが和らいだ。

「いやはや。まるで別人のようですよ」

尋の声が和らいだ気持ちを霧散させた。

「瑞希ちゃん。いいことを教えてあげよう」

俺は手に残った髪の毛たちに別れを告げながら床に落とし、にやりと口角を上げる。

「尋の部屋の、タンスの裏を調べてみるといい」

「ま、雅君!!」

「言っとくがな尋。お前は俺の大事なものを奪っていったんだ!これくらいの報いは受けやがれ!!」

ざまあみやがれ尋め。もしアレがバレたら実の妹に性癖が知られるんだ。そりゃあ焦るよな。

「くっ……瑞希。今の話は単なる冗談で————」

「もしもしお姉ちゃん? 実はお兄ちゃんの部屋のタンスの裏を調べてほしいんだけど……。うん。そう。よろしくねっ!」

すぐさま携帯電話を取り出して誰かに報告をする瑞希ちゃん。

その顔はとても楽しそうで————ああ、こいつらやっぱり兄妹な

んだなあって思われた。

つか瑞希ちゃん黒いよ！なんかとっても裏切られた気分なんだが・
・・。

「確かに瑞希ちゃんって正直に生きてるよな————自分自身に」

校舎裏での尋の言葉を思い出して一人頷く。

たがな、尋。自分は正直に生きてないみたいなこと言ってたけど、
お前も十分正直に生きてるよ。

確かに能力を使い始めた頃はコントロールが下手で、人に嘘をついて拒絶してたお前だけどさ。今は違うだろ？

出会ったばかりの頃の尋を思い出しながら、兄妹のやりとりを眺める。

変わったな、尋は。それに比べて俺は何にも変わってない。

・・・まあ、そんなことはどうでもいいか。

「ほら。部活始めるぞ」

絶望に打ちひしがれている尋と、さっきより五割り増し笑顔の瑞希ちゃんに声をかけて、俺は小さく笑った。

☆☆☆☆

俺たちの部活、騎士の安息所は、何をする部活かと問われれば何もしない部活、としか答えられないだろう。

言葉の通り、何もせずまったりと過ごすのがこの部活の主な活動だからだ。

尋と二人の時はもっぱら、某有名なカードゲームや、持ち込み禁止のポータブルゲーム機などを使って、遊び時間を潰していた。

本当に、よくこんな部活を作る許可が降りたもんだな。

その辺は尋のヤツに任せっきりだったからよくわかんないんだけどさ。

「それで、瑞希ちゃんもこの部活に入るのか？」

「はい。これからよろしくお願いしますっ」

ふむ。まあ男二人ってのも花がなかったし。全然問題ないな。

「ん、よし。とりあえず今日は何をしようか・・・三人で出来るゲームとかなんかあったかな――って、尋。鞆なんか持ってどうしたんだ？用事でもあるのか？」

俺がそう質問すると、尋は何を言ってるんだコイツは的な表情を見せる。

「時は金なり。いい言葉だとは思いませんか？」

また意味不明なことを・・・。

「つまり、ですね。いつものようにダラダラと過ごす時間があるな

ら、瑞希の能力を早く開花させよう、というわけです。……能力を使いこなすのに、どれだけの時間がかかるかなんて誰にも解らないですからね」

まあ、確かにそうだな。能力を完全にコントロール出来るようになるまでには個人差がある。

俺の場合はほぼ自学で、約三年間かけてコントロール出来るようになったんだ。

最初から教えてくれる人がいたら、だいぶ変わるんだろうが、最低でも1ヶ月以上は覚悟しておいた方がいいだろう。

「そうだな……確かに、早めに行動してた方がいいのかもな。下手すりゃ、コントロール出来るようになる前に、俺たちが高校を卒業してしまう可能性もあるしな」

そうと決まればあとは本人次第だ。

「瑞希ちゃん。どうする？部活ってことは毎日放課後に色々やらなきゃならなくなるんだが、大丈夫か？」

「がんばりますっ！」

いい返事が聞けたところで、さて、何から始めようか。

「とりあえず雅君には、瑞希と一緒に手をつないで下校してもらいます」

「ほう。尋、俺が目立つの嫌いなもの知ってるよな？」

コイツとはそろそろお話という名の殴り合いでもしとかなきゃいけないらしい。

人の嫌がることを無理矢理させようなんて本当にドSだな。

しかし、俺は尋に対してはNOと言える日本人でありたい。

「大丈夫ですよ。今の中途半端な時間なら帰宅部は校舎の中にはあまり残っていないはずですし、部活生は言うまでもなくそれぞれの部活動に勤しんでいるでしょう」

「……でもなあ」

瑞希ちゃんは可愛い。しかもかなり上位レベルの可愛いだ。

そんな瑞希ちゃんと手を繋いで下校なんてしたら確実に目立つだろう。

ぶっちゃけ不釣り合いだし、どうしようか。

「・・・瑞希ちゃんがいいなら」

結論。結局どうするかを決めるのは瑞希ちゃんだ。

「私は大丈夫ですよ。問題ないですっ」

・・・仕方ないな。

鞆を手に取り立ち上がる。

「さてさて。僕がいては邪魔でしょうから遠くから見守ることにしましょう」

そう言って、尋はいい笑顔を残しながら部室をそそくさと出て行った。

「い、行きましょう」

手を差し出す瑞希ちゃん。

さっき黒瑞希ちゃんを見てしまったし、なんか微妙な感じだがやっぱり恥ずかしいな。

俺は瑞希ちゃんから目をそらしながら、その手にそっと触れた。

その手はあったかくて、小さくて。なんだよコレ。緊張しすぎだぞ、俺。

妙な沈黙が部屋に漂い、耐えきれなくなってきた俺は一步踏み出した。

「・・・行こう」

第四話 蠢く影

人から注目されるのは嫌いだ。視線の中に嘲りと蔑みが混ざっている気がして不安になるから。

自意識過剰なのはわかってる。でも、もし何かの間違いで、捻れてしまった、らもう後戻りは出来ない。

だからこそ、自己防衛の為に、みんなの為に俺なんかと深く関わるのはやめた方がいい。

影でこっそりと目立たないように生きる。それが一番安全なんだ。だから――――。

☆☆☆☆

「雅君先輩？」

瑞希ちゃんの声にハッと我にかえり、何でもないと笑ってごまかした。

放課後の校舎の中。茜色の日がさす光景にはなんともいいがたい気持ち湧き出てくる。

少し昔のことを思いだしてちょっと妙な気分になってしまったが、もう大丈夫。

今の俺は、こうやって人と手を繋げるんだ。昔の俺とは、違う。

そう自分に言い聞かせて小さく深呼吸。

「で、何の話だっけ？」

「ええー。聞いてなかったんですか？・・・しょうがないですね」

呆れたように唇をとがらせる瑞希ちゃん。

「今の私じゃ、まだ雅君先輩には声が届かないかあ・・・」

「え？」

「いや、何でもないですっ」

あはは、と笑って何かを誤魔化す瑞希ちゃん。

声が小さくてよく聞こえなかったけど、まあ、大したことじゃないだろう。

「そ、それより雅君先輩って優しいですよ。ほら、お兄ちゃんが無理矢理髪の毛切ったのに、全然本気で怒らなかったです」

「・・・んゝ・・・なんつうかな。アイツのやることにいちいち口を出しても怒るだけ無駄なんだよね。ま、俺もそれなりに仕返しはしてるし、お互い様でしょ」

「もう。そんなこと言ったらお兄ちゃんつけあがりますよ？ガツンと何かアクションを起こさないと」

瑞希ちゃんの言葉に苦笑がこぼれる。

やっぱ瑞希ちゃんは尋にそっくりたゝ。

「つと、んじゃあちよつとお別れだな」

下足箱は学年ごとにわかれているので、校門のところで待ち合わせる約束を取り付けて一旦別れる。

靴を履き替えていると、尋がどこからともなく現れてニツコリと笑む。

「いい雰囲気じゃないですか。この調子で本当に付き合ってくれば僕としても安心なんですけどね」

安心・・・ねえ。まあ、言われてみて嬉しくないと言ったら嘘になるか。

「ねえーよ。これってあくまで恋人ごっこなんだろう？大丈夫。そこんところは意識しながらやるから」

「・・・・・・・・・・そうですか」

苦笑する尋。・・・なんかムカつくな。

「とりあえず家まで送ってやればいいだろ？」

尋が頷くのを確認してから、待ち合わせ場所の校門前に向かう。

「お待たせ」

校門の所にはすでに瑞希ちゃんの姿があったので、一応声をかける。

「は、はいです」

慌てたような仕草にどこか違和感を感じた。

「何かあった？」

「なんでもないですよ。さあ、早く帰りましょう」

俺は首を傾げながら、瑞希ちゃんが差し出してきた手を握り返そうと手を出して、少し停止させた。

まだポツポツと学生の姿が見える。

恥ずかしい気持ちに少し躊躇うも、あることに気づいて躊躇いなど霧散した。

瑞希ちゃんの革靴が異様に汚れているのだ。

しかも自然な汚れではない。まるで色の付いたチョークで線を描いたような、そんな汚れ方。

見覚えがある。まだ俺が能力を使いこなせなかった時に、歪いびつくに捻れた人間関係の末に見覚えが。これは――――。

（いじめ、か）

どこか懐かしさを覚えるような響き。俺が人と接したり目立ったりするのが嫌になった主な原因はソコにある。

（まだ入学式から日も経ってないのに、よくやるなあ）

理由は解らないけど、どうせ妬みの類だろうな、たぶん。

瑞希ちゃん可愛いし、その兄貴はイケメンだし。

でも、今はまだ俺が何かをしていい時じゃない。

むしろ悪い方向に捻れる可能性もあるわけだし。

横で楽しそうに笑っている瑞希ちゃんの手は、微かに震えていた。

俺に出来ることは、話に合わせて相槌を打つことと、その手をギュッと握り返してやることだけだった。

☆☆☆☆

瑞希ちゃんを家に送った俺は、家には向かわず近所の公園へと足を運ぶ。

そこには尋がいた。尋はブランコに腰をかけてブラブラと揺れている。

ここはいつの間にか、本当の部活をするための待ち合わせ場所になっていた。

「瑞希ちゃん、元気なかったぞ」

そう声をかけると、尋はブランコから飛び降りて小さく頷いた。

「知ってますよ。けど、まだ手を差し出すには早すぎる。そうでしょう？」

尋も瑞希ちゃんのことは気づいていたらしい。だが、今は人手が足りない。

だから、瑞希ちゃんの感情を大きく動かすような何かに俺や尋が干渉してはいけないのだ。

たとえばそれが、瑞希ちゃんの心に傷を残すことになっても。

「では、行きましょうか」

場の湿った雰囲気を誤魔化すように尋は元気な声を出す。尋はきつと、他人の俺には理解できないくらい辛いはずだ。

「そうだな」

俺に出来ることは、いつものように返事を返すことだけ。

風が髪を揺らす。短くなった前髪を手で撫でながら、茜と黒が混じったような空の果てを見渡す。

何故か心が揺れた。

☆☆☆☆

影、と呼ばれる異形がいる。一般的な呼び方をすれば妖怪や、幽

霊といったものだ。

それを狩り、もしくはこの町から追い出すのが騎士の安息所の本当の活動内容になる。

影が蠢くのは夜だ。学生服では目立つが、いちいち着替えるのも面倒だし、不良学生を気取りつつ街中を歩く。

近所のショッピングモール。そこはすでに大人の世界だ。学生の姿もちらほら見えるが、どれも高校生以上。

小さな子供が友達同士で歩くには遅い時間だろう。

影は本能的に人が多いところに集まる。だから、こういう場所を歩かないといけないわけだが、なんというか……。

「ねえ、君たち暇だったりするう？」

尋が隣にいるせいで逆ナンに滅茶苦茶遭遇する。

声をかけてくる女性の99%は尋しか見てないのだ。

リア充爆発しろ。

「いえ、僕は——」

「がんばれリア充」

助けを求めてくる尋の視線を無視し、一人離れる。

どうせ二手に別れて探すんだし、いいタイミングだ。

「じゃあ、俺はあっちを探すから」

「ちょっ——！？」

「いいから、お姉さんたちと良いことしましょう？」

は、ははは！ざまあみやがれ！・・・あれ？何か目から汁が。なんだらうこの敗北感。

「これだからリア充は」

言ってて虚しくなってきた。

影の気配を探りながら適当にぶらつく。

携帯を取り出して時間を見ると午後7時を少し過ぎた辺りだった。

まだまだ、影がよく出現するピークまでには時間がある。

家に帰っても晩飯なんて用意されてないし、何か食べようかな。

そう思いつつ、某ハンバーガーショップを目指す。

「は、離してください……」

人混みの中でその声が聞こえてきたのは奇跡に近いだろう。

聞き覚えのある声につられて辺りを見回すと、案の定見たことのある人物が。

「何やってんだ・・・」

相良 香撫>さながら かなでく。三姉妹の三女が二、三人の男に絡まれていた。

三女と一緒にいる女の子は友達だろうか？

怯えたような表情で身を寄せ合う二人。見て見ぬ振りをする周りの大人たち。

「しゃーなしだな」

小さく息を吐いた俺は、絡んでいるヤンキーっぽい男の一人めがけて足を動かした。

第五話 日常

俺は人混みの中を素早く移動し、男たちに距離を詰める。

近づいてもナンパに夢中で気づかない男たちの一人の頭をめがけて足を振り上げた。

もちろんあてたりはしないさ。なんせ、俺の身体能力は普通じゃない。

耳の横で足を寸止めさせる。高速で動かした足は風を生み、それは見えない衝撃へと変わった。

男は右耳から血を垂らしながら倒れた。鼓膜か何かが破れたのだろう。

（力加減むずいな・・・）

特に最近人間を相手に立ち回ることにもなかったため、なおさらだ。

仲間が突然倒れたことに驚愕の表情を見せた残りの二人は、俺の姿

を見ると怒りを露わにした。

「デメエ！一体何だ！」

足を降ろし、周りの注目を集めていることに気づいた。

うう・・・何やってんだろ、本当。

極力顔を伏せながら、目立たないよう声を小さくして男の質問に答える。

「通りすがりの、一般庶民」

その答えをどう思ったのか、ヤンキーさんたちからプツンという音が聞こえてきたような気がした。

瞬間。二人の男は同時に俺の顔めがけて拳を振り上げる。

「ふざけんなデメエ！」

「なめてんのかゴラァ！」

俺はその拳を体勢を低くすることで交わし、プツと吹き出した。

「生ゴラァ初めて聞いたわ・・・やべえ、笑わせんなよ」

的を無くした拳は宙を舞い、勢い余って倒れ込みそうになる二人の鳩尾辺りに手を配置。

少しだけ力を込めて拳を鳩尾にめり込ませた。

倒れるヤンキー共。おおーと野次馬から声があがった。

・・・ってか何だ、この野次馬の数は！こうなったら全力全開で逃走しなければマジで具合悪くなる。人多すぎだっけの。

俺はチラリと我が妹とその友達に視線を向ける。

「ガキは早く帰れ」

視線を動かし、人混みの隙間を見つけてコンクリートの地面を蹴った。

適当な路地裏に入った俺は頭を抱えてしゃがみ込む。

「うおおお・・・俺はなんて恥ずかしくて目立つことをしたんだ」

後からジワジワと押し寄せてくる後悔の波。

確かに父さんから師匠からも困ってる女の子がいたら助けてやれって言われたけどさ、けど今回はちよいとやり過ぎた。

人前であんなことするなんて、絶対噂になる。そうになったら学校でも目立つ。

・・・最悪だ。

意気消沈しながら、ため息をつく。今日はもう、帰ろう。

☆☆☆☆

とぼとぼと歩き、帰路につく。家に着いたのは午後21時過ぎだ。

結局晩飯食べれなかったし、カップ麺あったかな、と玄関のドアを開ける。

いつものこの時間、三姉妹はすでに自分の部屋にこもっているので、安心して寛くくつろくげる。

（まずは風呂だな、風呂。）

俺は自分の部屋に鞆を放ると、疲れた体を癒すべく風呂場へ向かった。

☆☆☆☆

風呂は日本人が世界に誇れる生活習慣だと思う。

いつもはシャワーですませるが、何故かお湯がはってあったので堪能させてもらうことにした。

いや、まじで癒されるわ……。

目を瞑りながら今日を振り返る。……うん。厄日だったな、本当。

俺は小さく息をはいて、見知らぬ誰かに祈る。

明日はいいことがありますように。

☆☆☆☆

朝。いつも通りの時間に起きる。

三姉妹に会わないよう時間をずらすのは、すでに生活に馴染んできているようだ。

布団からのそのそと這い出る。着替えを手早くすまし、顔を洗いに
行くと、鏡に写った自分の顔に少なからず落ち込んだ。

尋から切られた前髪は運がいいのか悪いのか、パツツンにはなっていないかった。

しかし、いままであったものがないってのは、それだけで気落ちするものである。

（学校行きたくねえ・・・）

一瞬サボろうかとも考えたが、家に一日中いるイコール三姉妹に出会ってしまうのでそうもいかない。

大きくため息をつき、顔に冷たい水をかけた。

朝食は簡単に食パンだ。作るのめんどくさいし。何より時間がない。

口に食パンを放り込み、鞆を取りに部屋まで戻ると、そのまま玄関

を出た。

「行ってきまふ」

もちろん、返事なんてあるわけないんだが。

☆☆☆☆

教室に着くと、尋が机に突っ伏していた。珍しいこともあったものだ。

「よっ。元気か？」

声をかけると、イケメン顔がかなりやつれていてちょっと引いた。

「……あの後、頑張ってたあの人たちからは逃げきれたんですが、また別の人たちに捕まりまして」

唐突に語り始める尋。

ほう。リア充自慢かこの野郎。

「危うくホテルに連れ込まれそうになったけど、それもなんとか頑張って逃げてたら、何故か影に滅茶苦茶遭遇しまして」

ま、まあ、俺は昨日影退治やってないしな……。

「家に帰ったら姉さんからいじられまくって……こんなに疲れたのは久しぶりですよまったく」

「イヤア、ソレハタイヘンダッタネ」

8割は俺が原因ですねわかります。

さすがに不憫に思えてきた俺だが、前髪を切った途端に周囲からの視線が強くなった朝のことを思いだし、同情の心をバツサリと切り捨てる。

まじで吐きそうだったからな朝。つーか前髪切っただけで目立つ俺

ってなんなの？

ああー顔がキモオタすぎるんですねわかります。

俺は自分の席に突っ伏すと、大きくため息をつく。

「ため息ついたら、幸運が逃げていくんだぞ、とか言ってみる」

突然の声。俺なんか気さくに話しかけてくるやつは限られているから特定は楽だ。

顔をゆっくり上げると、眠そうな目を俺に向けてくる女の子の姿が。

なぜか裾の長さが合っていない制服。地球人とは思えない桃色の髪。そしてペツタンコな胸。

「雅>まさく、今何か失礼なこと考えた、とか言ってみる」

「別に。ただ如月>きさらぎ<の胸の貧弱さに嘆いていただけだ」

「・・・・・・・・私、女の子なんだ、とか自己主張してみる」

「・・・・・・・・ああ。わかったからそんな泣きそうな顔すんなってマジで。お前のファンどもから殺される」

こいつの名前は如月 九ノきさらぎ このく。このクラスでも目立つレベルの変人だ。

見た目の容姿もあるが、電波的な言動の数々から、コアなロリコンどもがこいつのファンクラブを設立している。

俺とコイツが知り合うきっかけも、横で突っ伏している尋にあるんだが・・・・・・・・まあ、どうやら如月は俺に用があるようだ。

「で、何かあるんだろ？」

じゃないと、如月が教室の中で俺に話しかけてくるなんてことは滅多にない。俺が目立つの嫌いだって知ってるし、こう見えて如月は心優しい女の子なんだ。

「前髪切ってたから、近くで見に來ただけ、だったりして」

前言撤回。コイツは興味本位で俺を目立たせようとする悪い子だ。

「……………すぐに怒っては、いけない。確かに人の為に、怒れるのはすごいことだけど、そのせいで雅と会えなくなる、のは嫌だ、とかお願いしてみる」

どうせ無駄だけど、と言い残して如月は去っていった。

今の電波的発言を聞かせるために俺の所に来たのだろう。

出会った頃は判らなかったその意味も、今では少し理解できる。

なんたって如月は、預言者なのだから。

とりあえず何か事件があるから、その時に冷静な対処しろってことかな。たぶん。

チャイムが鳴り、担任が教室に入ってくる。ちなみに如月は神の遺物>ジャンクくを持っているわけではない。

世の中には、自身の能力として漫画やアニメのような力を持っている奴がいる。

本当に、不思議でいっぱいだよ。この世界は。

☆☆☆☆

放課後。昨日と同じく瑞希ちゃんと下校する。

ちらっと靴を見ると、今度はペンか何かで落書きされていた。

それを見ないふりをしながら、昨日と同じように並んで歩く。

たぶん油性で書かれてるんだろうなーとか、昔を振り返りながら思っている、瑞希ちゃんの首あたりに青い痣を見つけた。

(このままじゃ、やばいかな)

俺の時には、暴力とかはなかったんだが、瑞希ちゃんにはそれがあ
りそうだ。

無理に笑っている瑞希の横顔が、いつか見た鏡の前の自分に重なる。

「ねえ、瑞希ちゃん」

これは同情なのだろう。

そしてただの自己満足だ。

「あ、明日って、暇かな？よかったら買い物に付き合ってほしい・
・とか言ってみたり」

おお。如月の口調が感染＞うつかった。

人を誘うことじたい何年ぶりだろうか。

内心ビクビクしながら瑞希ちゃんの反応を待っていると、瑞希ちゃ
んは立ち止まって笑顔の花を咲かせた。

「い、いいんですか！？ 私なんかが雅君先輩とお買い物に行つて！」

俺は苦笑しながら頷き、ただしあんまり人が多くないところにね、と付け足す。

少しでも、瑞希ちゃんの心が軽くなればそれでいい。俺みたいに、どん底に落ちる必要なんてないんだ。

春の風が、優しく髪を揺らした。

第五話 日常（後書き）

誤字脱字があれば以下略

第六話 デート

デートとは、忌み嫌うリア充共のイベントで、俺には縁のないものだと思っていた。

つまり何が言いたいかというとだな――――。

「何をすればいいんだ？」

☆☆☆☆

いつもより早く起きた俺は、自分で考えられるだけのお洒落をした。

待ち合わせ時間は、学校の校門前に10時30分。

現在は8時ジャスト。少々早く起きすぎたようだ。

着替えをいつもより若干時間をかけて行い、顔を洗って朝食を食べる。

チラッと時計を見ると、9時を少し過ぎた辺りだった。

まあ、誘ったのは俺だし多少は早めに行っとかないとね。

そう思い手早く食器を洗うと、部屋に戻りポケットに財布をねじ込んで玄関へ向かった。

靴をはいていると、階段を降りてくるような音が。

「まじかよ……」

朝からの不運に嘆きつつ、逃げるように玄関のドアノブをひねる。

「待って！……ください」

まさか声をかけらると思わず、後ろを振り返る。

そこにいたのは、先日不良に絡まれていたこの家の三女、相良 香

撫であつた。

「・・・何か、用？」

俺は出来るだけぶっきらぼうに答える。正直あまり関わりたくないのだ。

「あの、その・・・この前は本当にありがとうございました。私たち、あなたに酷いこと、ばっかりしたのに」

まあ、酷いことしたって自覚はあるんだな。と、この家に来たばかりの頃に受けた嫌がらせの数々を思い出す。

いじめってよりも明らかにレベルが低い嫌がらせだったから、実はあんまり気にしちゃいないんだが。

謝ってくれるなら・・・うん。それだけでなんか嬉しい。

つか、三女はほぼ何もやってないに等しいし。問題はあとの二人の方だからな。

「いいよ別に。あんたは許す。これでいいだろ？俺、用事あるから

もう行くわ」

こっちは早く待ち合わせ場所に行きたいんだよ。つか、こんな二人で喋ってるところを長女か次女に見つかったらそれこそ、どんな嫌がらせを受けるか。

「わ、私は別に許してほしいとか思ってるわけじゃないんです！」

「お、大きい声出すなって！」

俺が逃げるために玄関のドアを開けると、玄関の前には鬼がいた。

無言で俺を睨むのは、長女と次女。

なんでこんな時間に家の外に？と疑問がわいたが、とりあえず今は逃げよう。早く逃げると本能的なものが警告音を滅茶苦茶鳴らしてるのだ。

「香撫と何があったのか、話しなさい」

と、睨む長女の相良 志穂。

その目からは、なぜか、師匠と同じような威圧感が感じられた。

その後ろでは、次女の相良　奈留も負けじと俺を睨んでいる。

逃げる方法を考える。今捕まったら、瑞希ちゃんとの約束の時間には間に合わないだろう。

その時、風が吹いた。

長女と次女のスカートが揺れる。

そういえば朝のニュースで今日は風が強いとか何とか言ってたっけな。

見えたのは白と黒。

長女が白で次女が黒な。

スカートを抑える二人に小さく感謝しながら、俺は玄関を飛び出した。

「ま、待ちなさい！」

朝からいいものを見せていただいて大変ありがとうございました。

俺の足に普通の人間が追いつけるわけもなく、何かを喚いている二人の影を見ながら小さくほくそ笑んだ。

☆☆☆☆

学校の校門に着いた俺はかなり後悔していた。

（今日はさすがに帰れないよな・・・）

色々やりすぎた感があるし、最悪明日も日曜で学校休みだ。

ネカフェ泊まりも覚悟しとくべきかな。

ため息をはきつつ財布の中の心配をしていると、ふわりと甘い匂いが鼻に触れた。

「はぁ・・・はぁ・・・雅君先輩、お待たせしました」

声の方を振り向くと、いつもとは全然違う瑞希ちゃんの姿があった。

全体的に明るめの色で構成されている服は、瑞希ちゃんにかなり似合っている。

携帯を取り出し時間を見ると、まだ10時になる前だった。

「瑞希ちゃん」

お互いにかなり早く来たなあ、と苦笑しつつ、とりあえず褒め言葉を模索する。

「に、にに似合ってるよ」

女の子を褒めるなんて初めての経験に自然と血が頭に上っていくのを感じた。

こんな台詞をさらりと言えるゲームの主人公たちって本当に凄いな。

「あ、ありがとうございます。えへへ」

ぐはっ！

思わず鼻血出そうになったぞまじで。はにかみながらえへへはまじやヴァイって。

「雅君先輩、どうかしました？」

「いや、なんでもない」

冷静を装いつつ、小さく深呼吸。

「さて、行こうか」

俺たちはとりあえずショッピングモールに向けて歩き出した。

……と、話は冒頭に戻るわけで。

ショッピングモールに着いた方がいいが、それからどこに行けばいいか判らない。

ここは無難に映画か何かか？それともショッピングでもしてブラブラがいいのか？

ああ、くそっ！このままじゃ瑞希ちゃんに、『デートもまともに出来ないの？この童貞野郎』なんて思われるかもしれない。

誰か、誰か俺に助けを！

「あの・・・どうしたんですか？」

心配そうに顔をのぞき込んでくる瑞希ちゃん。

・・・落ち着け、落ち着くんだ俺。そうだ。よく考えてみる。

瑞希ちゃんにどこに行きたいか聞く。これでいいじゃないか。

気持ちを落ち着けて、自然を装い質問する。

「瑞希ちゃん、どこか行きたいところある？」

「えっ・・・？ 雅君先輩がどこかに連れて行ってくれるんじゃない・・・す、すみませんっ！ 人に頼ってばかりはいけませんよね。本当に、ごめんなさいっ！」

最悪だ。

誘ったのは俺なのに何も考えてないなんて。しかも瑞希ちゃんにこんな風に謝らせて。

「・・・ごめん」

やっぱり、人と付き合うのは苦手だ。

尋のおかげで改善されたと思っていたけどそれは間違いだった。

何となく重い空気になり、自分を攻めながらショッピングモールの中をぶらつく。

「あの、雅君先輩？」

「……ん？」

「映画とか、興味ないですか？ほら、ちょうどあそこに映画館あるし」

指を指す方向を見ると、確かに、映画館があった。最近出来たばかりなのか外観がとても近代的である。

やっぱり眩しいな。そう思った。

俺には悪くなった空気のまま会話を切り出す勇気なんてない。ただ自己嫌悪に陥るだけ。

最悪だ、俺は。

それなのに瑞希ちゃんは凄いな。年下なのに機転もきくし、何より優しい。

俺なんかを気にかけてくれる。……なんだろうなこの気持ち。

尋も同じだ。冷めた俺の心を、太陽みたくポカポカにしてくれる。

ほんと、この二人にはかなわないよ。

「・・・うん。じゃあ、行こうか」

俺の返事を聞いた瑞希ちゃんは、とても嬉しそうに微笑んだ。

「はいっ！ありがとうございます！」

感謝したいのは、俺の方なんだけどなあ・・・。

そう思いつつ、にこりと笑い返した。

☆☆☆☆

『今日は楽しかったです。よかったら、また今度誘ってくださいね』

アドレスを交換して別れた直後、瑞希ちゃんからさっそくメールが届いた。

よくよく考えてみると、今日の目的は瑞希ちゃんを励ますことだったはずだ。

いじめなんかに負けるなって、遠回しに励ますつもりだったんだが、逆に色々と励まされた気がする。

俺が瑞希ちゃんに渡せたものは、メルアドと映画館で買った320円のキーホルダーだけ。

キーホルダーですら渡すのに苦労した。本当は映画の後に寄ったハンバーガーショップでも奢ってやりたかったのだが、断固拒否された。

もうちょっと人に甘えてもいいと思うんだがなあ……。

『了解。瑞希ちゃんの都合いい時にまた誘うから』

そう返信をして、帰宅する。

影を狩る仕事は、尋が一人でやると言っていたので任せた。

尋にも、今度何かお礼しなきゃな。

空を見上げた。星が綺麗に瞬いている。

まだ肌寒いせいか、息が白く吐き出された。

人を思いながら生きるのも悪くない。うん、悪くないな。

第七話 過去の過ち

玄関の前に立った俺は、ふと今朝のことを思い出した。

ドアの向こうには、恐ろしい長女次女が待ちかまえているかもしれない可能性が頭をよぎる。

しかし、だ。いまさらネカフェのあるショッピングモールの方まで戻るのもめんどくさい。ということで、このまま帰宅することにした。

適当な言い訳を考えながらドアを開けると————誰もいなかった。

一階から物音が聞こえないので、どうやら三姉妹はいつものごとくそれぞれの部屋にこもっているらしい。

小さく安堵の息をはきつつ、自分の部屋に向かった。

☆☆☆☆

周りからあからさまに疎外されている感覚。手や肩が触れても、まるで空気を相手にしているように振る舞われる。

俺はこれが夢であることに気づくと、眉を寄せた。

また、この夢か。

今でもよく覚えている。小学4年生の秋。4時限目の終わり。

給食の前の時間ということもあり、浮つく生徒がちらほらいる普通のクラス。

そのクラスで、俺はイジメを受けていた。

原因はなんだったのだろうか。

元々人と話すのが苦手だった俺は、半年前に父さんが研究のために

どこかの遺跡から持ち帰っていた謎のオーパーツの能力を使って人とあまり接触しないようにしていた。

小さなガラス玉のようなそれを始めて見た時は、確かに感動したのを覚えている。

だって、何百年も前の遺跡から、完全に球体で、尚且つパチンコ玉の半分くらいのサイズのガラス玉が見つかったのだから。

父さんの影響でそういうことになり興味があった俺は、父さんにオーパーツを見せてとねだり続けてやっと見せてもらうことが出来た。

「すごい……」

こぼれたのは感嘆の一言。父さんはそんな俺を見て苦笑していた。

そしてある違和感に気づく。ガラス玉が、ゆっくりと浮き始めたのだ。

初めは何かの見間違いかと思ったが、啞然と口を開いている父さんの様子から察するに、どうやら見間違いではないらしい。

俺の顔の高さまで浮かび上がったガラス玉は、俺の左目をめ掛けて飛んできた。

左目に、激痛がはしった。それからどれくらい時間が経っただろう。

俺はベッドの上に寝かされていて、声も噎れていた。

そして左目に違和感を感じるとともに、それが妙にしっくりときていた。

こうして俺は騎士になった。

起源の騎士＞knight of origin＜。全ての始まりにして、全てを終わらせる為の能力を俺は手に入れたのだ。

能力は、捻＞ねじくる力。その干渉力ほどの騎士よりも強く、もっとも神に近い。

唯一の体内型神の遺物＞ジャンク＜である。

全て父さんが調べてくれたことだ。

そして能力を初めて発動する為の条件である感情の爆発は、俺と神

の遺物>ジャンク<が適合する時の痛みで満たされていた。

普通の小学生だった俺は、世界をも滅ぼせる力を手に入れたのだ。

能力をコントロールするための訓練も兼ねて、俺は父さん以外の人との繋がりを捻った。

そして事件は起きたのだ。

「おい、お前」

クラスのリーダー的な男子の一人が声をかけてくる。

捻った人間関係のせいでイジメにあっていた俺は、その原因が自分にあることを理解していた。

だからどんな嫌がらせでも耐えられたし、納得も出来た。

これはただの実験だ————。あきらかに子供の考えではない。

今思えば、一番捻れて歪んでいたのは俺の心だった。

「なに？」

お気に入りの小説から顔を上げ、話しかけてきたヤツを睨む。

他の生徒たちは、一触即発な空気に身を固くしていた。

「いい加減うっとーしいからさあ、まじで死んでくんない？」

その取り巻きがケタケタと笑う。

このリーダー的な男子生徒のことは、聞こえてくる噂で少しだけ知っていた。

「親から怒られて苛つくからって、八つ当たり？」

この男子生徒の親は相当に厳しいらしく、テストで90点以下を取ろうものならボコボコに殴られるらしい。

そういえば昨日の数学のテストであまり良い点が取れなかったな事を喚いていたな。

男子生徒の顔をよく見ると、青あざが所々に見えた。

「お前……まじで殺すぞ」

小学生の殺す発言などただの脅しにしかすぎない。俺もそれは理解していた。

あまり目立ちたくないいつもの俺なら、ここで謝ってやり過ぎすの
だが————「やってみろ、親にも刃向かえない意気地なしが」

口は勝手に動いていた。

自分で思っていたより、イジメを受けて相当なモヤモヤがたまっていたらしい。

半年間のイジメなど、どれだけ難しい小説を読んで頭の中だけ大人になった気でいても、心は耐えきれなかったようだ。

自分で作った状況なのに、と自分自身への苛立ちも、モヤモヤを後押しする。

男子生徒とその取り巻きは啞然とするも、明らかに怒りの表情を浮かべ殴りかかってきた。

男子生徒の膝が鳩尾に入る。息を詰まらせながらしゃがみこむと、隙ありとばかりに四方八方から足が俺の体目掛けて飛んできた。

痛かった。泣きそうなほどに痛かった。

「お前なんて父親しかいねえんだろ！しかもろくに仕事しないで家にこもってるんだってなあ！」

違う。今は俺が小さいし、母さんもいないから、父さんは仕方なく家の中で研究しているだけなんだ！

「母親も死んじまってるんだってなあ？あはは、ざまあみろ」

何かが、吹っ切れた。

ざまあみろ、だど？

母さんがいなくなってどれだけ寂しかったと思ってる。父さんが好きな遺跡巡りを、自由に研究出来ないのが自分せいだって、俺がどれだけ自分を攻めたかコイツは知ってるのか？

何も知らないで、コイツは――――。

☆☆☆☆

「――――ッ、はあ、はあ・・・」

また、あの夢か。

初めて生き物から大量の血が吹き出る瞬間を目撃したあの時。

むせかえるような血の匂い。誰かの悲鳴。そして、原型を留めていないクラスメイトだったもの。

感情の爆発とともに起きた、能力の暴走。

「わかつ・・・てるよ」

わかつてる。わかつてるさ。

あれは自分への戒めになった。人外は人と接するな。心の中の誰かがそう呟いた。

能力をコントロールするための訓練は十分積んだ。

万が一を考えて知り合ったヤツとは、どこか線を置いて接した。

あのと看した身勝手を、俺は二度としてはいけない。

そう。小学4年生だった俺は、卑怯なことをした。

原型を留めていない肉塊は、存在自体を捻り消した。あの男子生徒の存在も、この世から消えるように捻り消した。

あの事件を覚えているのは、俺一人だけなのだ。

汗ばんだ手で枕元の携帯を取り開くと、午後1時を少し過ぎている。

何度か深呼吸を繰り返し、最後に大きく息をはく。

最近、尋や瑞希ちゃんに心を開きすぎていたようだ。同じ神の遺物>ジャンクくを持っていたても、俺の能力が一番強いはずだ。

もしかしたら――――。考えて、首を横にふる。

大丈夫だ。俺が気をつけてさえいれば、大丈夫。

小さく鳴ったお腹の音に、一人苦笑した。

第八話 お節介な騎士

月曜日。学生にとってこの曜日がどれだけ憂鬱な曜日なのかは学生を経験したことのある人なら誰もが共感してくれるだろう。

俺はといえば、昨日の朝に見た夢を未だに引きずっていた。

長い間忘れかけていたトラウマを無理矢理思い出したのだ。憂鬱になっても、仕方ないだろ？

そういえば、あの夢はいつから見なくなったのだろうか。中学に入るまでは毎日のように見ていたし、それからも———「浮かない顔をしていますね、雅君」

不意に隣から誰かが喋りかけてきた。

「そっとしておく、という選択肢はないのか？」

顔を見ずに答える。

誰かはもうわかっていた。

「すみません。考えもつきませんでしたよ」

確認のため視線だけ動かすと、にこにこ笑みを振りまいているイケメン。尋がいた。

なぜか暗い気持ちが和らぐを感じる。そういえば、あの夢を見なくなったのは尋と出会ってから——いや、そんな気持ち悪い考えはよそう。偶々、尋と出会ってからあの夢を見なくなったただけだ。うん、そういうことにしよう。

「要件は？」

尋がこんな場所にいるってことは、何かあるのだろう。こいつの家からここまで来るのは、学校に行くのに二度手間だからな。

「ええ、これを」

尋が学生鞆から取り出したのは一冊のノートだった。

俺はそれを受け取り、中を開いて——眉をよせた。

「酷いな」

ノートには、悪口のようなものがびっしりと書いていた。字から察するに……男子が書いたような字もいくつか見られた。

ノートの裏には瑞希ちゃんの名前が。人ってのは怖いもんだ。

一人が誰かをイジメ始めたら、まるでウィルスのように拡大していく。

俺はノートを閉じると、尋に返した。

「たぶん、俺の時より酷いぞ」

尋には俺が人と接するのを嫌う理由を話してある。というか、師匠に無理矢理話せといわれていた現場に尋もいた、という方が正しいか。

「僕、珍しく怒ってるんですよ。妹がこのことを話してくれなかった自身の頼りなさにも。妹にこんな事をして、喜んでいるヤツらにも」

尋の顔はいつもと変わらない、が、そこには確かに怒りが渦巻いていた。

俺もその気持ちには賛同出来る。瑞希ちゃんと出会ってそんなに経っていないけど、瑞希ちゃんがいいこなのは判る。

いつの間に校門の近くまで来ていたのか、周りには沢山の生徒がいた。

俺の気分は思い出したかのように冷めて、具合が悪くなってくる。

「マジ必死扱いて、バカみたいだったよね」

少し前を歩く女子生徒の集団の声が、なぜか耳に残った。いやな予感がする。

「悪い、先に行ってくれ」

「雅君・・・？」

考えろ。あの女子生徒たちは多分一年生だ。

そして集団の中の一人が持っていたのは何だった？あのキーホルダーが付いた携帯電話。あれはたぶん――――。

☆☆☆☆

「瑞希ちゃん！」

必死に走り回り、やっと瑞希ちゃんを見つけた。

瑞希ちゃんは鯉を飼ってある池の中に入り、必死に何かを探していた。

「先輩……」

俺の声に振り向いた瑞希ちゃんの顔に、胸が締め付けられた。

辛いときも笑顔を作っていた瑞希ちゃんが、泣いていたのだ。

制服はびしょびしょに濡れ、池の泥で汚れていた。

「瑞希ちゃ——」

「ごめんなさいっ！」

瑞希ちゃんは池から急いで出てくると、必死に頭を下げた。

「せっかく、雅君先輩から買ってもらったのに、せっかくやっと勇気を出せて」

瑞希ちゃんの頬を次々と涙が伝う。

買ってもらった？ ああ、あのキーホルダーのことだろ？ あんな320円の安物なんて気にすんなよ。

そう思ったものの、言葉にはならなかった。

「ま、待っててください。この池のどこかに投げたって、クラスの
子が言ってる」

流石に、我慢出来なかった。胸が熱くて、どうにかなりそうだった。

俺は瑞希ちゃんの頭に手を置くと、震えそうになる声を必死に留めて笑う。

「大丈夫、だから。俺と同じ気持ちは味わわなくていい」

このままだと瑞希ちゃん的能力は発動とともに暴走してしまうだろう。

こんな小さな体に、一体どれだけ不満をためていたのだろうか。

これが爆発したら、能力がどんなものであれ、きっといつか後悔することになる。

そんなのは俺一人がいい。

「尋」

声をかけると近くの木の影から尋が現れた。気配はずっと前からそ

こにあった。

「止めるなよ」

「まさか。むしろ僕も——」

「お前はここにいろ」

そこで瑞希ちゃんを安心させてやるんだ。兄妹だろ？

俺は何か言いたげな尋から逃げるように、全力で走った。

☆☆☆☆

「まったく・・・感情的になりすぎですよ」

それは雅君の良いところでもあり、悪いところでもあるわけですが・・・

今はとりあえず、こちらが先ですね。

「瑞希、コレを」

僕は先ほど取り返した携帯電話を瑞希に投げ渡す。雅君の様子がおかしいなど視線を動かした先に瑞希の携帯を持ってる女子生徒がいたから、穏便に話をして返してもらったわけですが。

「お兄ちゃん、コレ・・・」

「それよりも、雅君が今どこに行ったか判りますか？」

僕の言葉に、まさかと息を飲む瑞希。

さて、このまま全部を雅君に任せるのもアレですし、僕も動きますか。

☆☆☆☆

「落ち着けよ・・・」

暴走しそうになる感情を抑える。能力のコントロールはほぼ完璧になっているわけだが、万が一を考えて冷静さを失わないように気をつける。

向かうのは瑞希ちゃんのクラス。朝のHRが始まっているのか、廊下に生徒の姿はなく、各教室から小さなざわめきと、先生たちの声が聞こえてくるだけだ。

そして瑞希ちゃんのクラスの前に到着し、ドアに手をかけたところで動きを止めた。

考えてみる。今俺が文句を言ったところで瑞希ちゃんに対するイジメはなくなるのか？————むしろ、もっとひどくなる可能性だってあるんじゃないのか？

膨れ上がった気持ちが萎んでいく。そうだ。これはただのお節介。俺なんかは何をしても————。

「瑞希さんは・・・遅刻ですか」

担任の先生、声から察するに女だろう。その先生の、またか、といった声が聞こえてきた。

同時にクラスの中で笑いが起きる。

「先生えー、どうせ瑞希さんは来ないですよ。なんか、魚と泳ぎた
いって言ってましたし」

「魚・・・？ま、まあいいです。出席の続きを――――」

先生の声を上書きするように、生徒の声のボリュームがあがる。

「でもさ、瑞希って可愛いし、今度襲わねえ？たぶんすぐ股開いて
くれるって。あいつ弱虫だしさ」

「いいねえ。ナイフとかで脅せば」

耳に付くような男子の下品な会話。それを囁す女子の声。

もう、いいや。

瑞希ちゃんの泣き顔を思い出す。一瞬で冷めた気持ちちが沸騰し、俺は教室のドアを開いた。

集まる視線も気にならない。俺がやることは、歪みを捻って少しでもまともに直す。それだけだ。

よく教室を見渡すと、この前ショッピングモールで絡まっていた女の子と、妹の姿もあった。

瑞希ちゃんと同じクラスだったのか……。

まあしかし、そんなこと今はどうでもいい。

「誰だよ、おい」

教室の左端の後ろから聞き覚えのある声がした。

コイツはさっき瑞希ちゃんを襲うとか言ってたヤツだ。

確認なんてする間もなく、俺はそいつの席に向かって歩く。

揉め事に慣れているのか、そいつは怯える様子もなく俺を睨んでいた。

「俺は、そうだな・・・ただのお節介な臆病者ってことで」

「・・・何を言っただけだ！」

有無も言わずに顔を殴った。たぶん鼻くらいは折れているだろう。

「大丈夫。お前、等は人の心を傷つけた痛みを受けるだけなんだ。瑞希ちゃんが受けた、痛みを」

俺にその痛みは計り知れないだろう。けど、孤独の痛みや苦しみは知っている。

俺の場合は自業自得だけど、瑞希ちゃんはそうじゃないはずだ。

だからこそ、瑞希ちゃんをイジメていたこのクラスの奴らは、死なない程度に痛めつける。

もう、このなんともいえない気持ちを抑えつけるのは無理そうだ。

何人かがこの教室から逃げだそうとするも、窓も、廊下に繋がるドアも開かない。開くはずがない。

「この教室は世界から捻り離してあるから。逃げられるわけないんだけど」

さて、とりあえず一人づつ。時間は十分にあるさ。

第九話 能力の暴走

教室の中には、何人かの女子生徒のすすり泣く声だけが響いている。

俺は教卓に座り、そんな教室の様子を眺めていた。

時計を見ると、俺がこの教室に来てから30分程経っている。

初めの頃は多少喧嘩に慣れているヤツらが殴りかかってきたりもしたが、全員返り討ちにしてやった。

それからはずっと妙な沈黙が漂っている。

「こ、こんなことをして、退学は覚悟しなさい」

気絶している生徒を看病していたこのクラスの担任が俺を睨んでいた。

その声は心なしか震えている。俺は時計をチラリともう一度見ると、先生に視線を向けた。

「なら、イジメを放置してたアンタはクビだな」

うっ、とたじろぐ先生。若いし、新任かな。

「俺は別にどうなってもいいんだよ。けど、俺に責任取らせるなら、先生も、ちゃんと責任取ってもらわないとな」

今は出来るだけ悪役を演じなければならない。正義の味方が現れるその時まで。

不意に、教室の外で力を感じた。これは尋のものではない。つまり――。

「そろそろ、女子生徒にも罰を受けてもらわなきゃな。さて、どんなのがいい？」

出来るだけ厭らしい笑みを浮かべる。悲鳴のようなものが女子生徒たちからあがった。

教卓から飛び降りた俺は、手短に一番近くにいた女子に近づく。

その表情は絶望に染まっていた。

「さて、どうしてやろう————」

「お、お兄ちゃん」

服を引っ張られ右を振り向くと、妹の香撫がジッと俺を見ていた。

お兄ちゃんと呼ばれたのは初めてだ。つか、妹よ。俺と兄妹なんてバレたら次のイジメのターゲットは間違いなくお前になるぞ。

俺は敢えて妹をシカトし、女子生徒に迫った。

ガタンッ!!

突然廊下側にある教室のドアが揺れた。そして俺が捻った教室という空間が、元の世界の元の位置に戻ったことを感知する。

教室のドアを勢いよく開いて瑞希ちゃんと尋が飛び込んできた。

二人は教室の惨状を見て啞然とするも、尋の方は俺の意図に気づいたのか小さくため息をついた。

ちよつと待て。ため息ってなんだため息って。

「これ、本当に雅君先輩が……？」

顔や腹を殴られて気絶している複数の男子生徒。それを介抱している先生。恐怖を顔に張り付けた残りの生徒たち。これは全部、間違はなく俺がやった。

突然の来訪者に、教室がざわめく。

「み、瑞希、早く助けを呼んできなさいよっ！」

一人がそう言うのと、次々に言葉が飛び交う。助けろ、何とかしろ。イジメをしていたヤツらが、よく言えたもんだ。

ダンッ！と教卓を殴る。教卓は真ん中から真っ二つに割れた。

静まる教室。本当に、都合のいい奴らばかりだ。

ここには、自分のことしか考えていないヤツしかいないようだ。ま、俺も人のことは言えないんだが。だってそうだろう？ お節介はただの自己満足にすぎないのだから。

俺は怯える女の子の手を掴み、無理矢理自分の方に寄せた。

頭一つ分高い位置から女の子を見下しながら笑う。

「まずはお前から、ぐちゃぐちゃにしてやるよ」

「やめてください！」

瑞希ちゃんが俺に手をかざす。すると俺の手が女の子から弾かれた。

「……庇うのか？ こいつは、こいつらは瑞希ちゃんをイジメた奴らなんだろう？」

手をかざしたまま、表情を固くする瑞希ちゃん。

「……知ってたんですか？ 私がイジメられてたって」

「そうじゃなきゃこんな事はしない」

「なら、やめてください。私、もう十分ですから。これ以上、だれかを傷つけるのは――――」

「嫌だ」

俺は即答して、能力を発動させる。

瑞希ちゃんの近くにあった机を、まるで雑巾を絞るようにねじり上げた。

多少アレな設定だが、もっと残酷な役を演じよう。そうしないと瑞希ちゃんは、俺を、本気で倒す、ことが出来ないからな。

「死ねよ、ブス」

瑞希ちゃんに向けて言葉を放つ。その言葉に、瑞希ちゃんは今にも泣き出しそうな顔をした。

「そう、その顔だよその顔。悲しみに歪む顔、絶望に満ちた顔。俺

はそれを見るのが大好きなんだ。どうだ？多少でも心を許していた相手から裏切られる気分は」

「・・・今まで私に優しくしてくれたのはもしかして」

「このときの為の布石だよ。だってさ、甘い果実は熟させるもんだろ？」

我ながらよく言葉が出るもんだ。そういえば俺、今めっちゃ目立ってるな・・・頭痛エ。

ま、もうちょつとの我慢だ。

俺はわざとらしく瑞希ちゃんに手に向けて、^レ避けてもらうために言葉を紡いだ。

「捻れろ」

空間が歪む。まるで蜃気楼のように教室の一部がぼやけた。

瑞希ちゃんはギリギリの所で、歪みに巻き込まれるのを回避する。挑発といわんばかりの攻撃に、瑞希ちゃんは絶望を映した瞳で俺を

見た。

「なんでこんなこと・・・」

「なんで？決まってるだろう」

俺は今度こそと瑞希ちゃんに狙いを定める。

「お前が嫌いだからだよ」

瑞希ちゃんの目が見開かれ、その瞳からポツポツと涙がこぼれる。

流石にやりすぎたか？と思うも、やりすぎくらいがちょうど良いさと自分に言い聞かせる。

やっぱり、人を傷つけるのは気持ち悪いな。自分に吐き気がする。

能力は一度発動すると、その使い方、どんな能力なのかは、使用者の頭の中に自動インプットされる。つまり、瑞希ちゃんは完璧とはいかないまでも、多少は戦えるということだ。

けど、まだ早い。

それに俺は、これ以上危険なことに他の人を巻き込みたくない。

尋の強さは知っている。尋も俺も、師匠のしごきに耐えて人外の力を手に入れた。けど瑞希ちゃんは、普通の人が能力を持った、ただそれだけなのだ。

「信じてたのに……」

瑞希ちゃんの身体から、空間を歪めるほどの力が溢れ出す。

それはまさに、能力の暴走。さあ、全力で来い。全部俺が受け止めてやる。

瑞希ちゃん的能力は、さっき俺の手を、元の位置に戻した。ことから察するに、事実を無かったことにする類の能力だと予想できる。

「雅君先輩ならって、信じてたのに」

力が膨れ上がり、俺に迫ってくるのを感じた。

敢えて、それを受け止める。

力を受けた俺の身体は、手の指先からサラサラと砂のようになって消えはじめた。

なるほど。瑞希ちゃんの力は、存在を消す能力といったところか。

兄妹揃って、なんとまあチート臭い。

消える速度がゆっくりなのは、瑞希ちゃんが心のどこかで人を消すことに抵抗があるからか。優しい子だな。本当に。

ハッと我を取り戻した瑞希ちゃんが、必死の形相で何かを叫んでいる。

しかし、耳はすでに消えており、俺には聞こえない。尋に視線を向け、後は頼んだ、と目配せする。

尋が笑みで返事するのを確認した俺の姿は、教室の中から消失した。

第十話 仕組まれたシナリオ

風が冷たい。目をゆっくり開くと、視界には青い空が飛び込んできた。

俺はそっと息をはくと、ペタリと座り込む。身体の調子確かめるようにあちこち動かすも、異常は感じられなかった。

「・・・帰るか」

まだこの世界の時間は全然進んでいない。俺が瑞希ちゃんの教室に入って、せいぜい10分経っているかくらいだろう。

切り離れた教室が存在していた空間は、時間軸自体がこの世界とは違うのだ。向こうの10分がこちらの1分に等しい。

一応この後のシナリオも考えてある。まあ、その辺は尋が上手くやっているだろうから————俺は家に帰ってゆっくりしたい。

さすがに疲れたな。まじで。

いくら俺の力がどの能力よりも世界への影響が強いからと言っても、能力の使用タイミングがあと少し遅ければ俺はこの世界から消えていただろう。

絶対、尋に怒られるよな、と苦笑しつつ立ち上がる。

今日は何のアニメが放送されてたかな。

☆☆☆☆

『と、いうわけです。それで雅君は、これからどうするのですか？』

電話越しに聞こえる尋の声は、疲れを感じさせた。いや、悪いね、本当。

時刻は夜の9時を回っている。ほぼ朝といえる時間に帰宅した俺は、すぐ風呂に入り、晩飯も16時には取って部屋にこもっていた。

先ほど尋から電話があり、瑞希ちゃんのイジメは無事に解決したそうだ。

瑞希ちゃんのイジメを止めさせるために俺が考えた策は、俺が悪を演じてそれを瑞希ちゃんに倒してもらい、クラスのヤツらに瑞希ちゃんの強さと、困った時に助けてくれる人という印象を強く残すというものだった。

たぶんだが、瑞希ちゃんのイジメは話し合いで解決する域は越えていた。俺にはこんな茶番みたいな策しか思いつかなかったんだよ。

瑞希ちゃんは自分の力で人を消したことにだいぶショックを受けていたみたいだが、俺がギリギリで能力を使って助かっていることを尋はちゃんと説明してくれたらしい。

口でこの策を言ったわけでもないのに、アイコンタクト一つで察することができる出来た尋はまじすげーよ。

まあ、尋も何か強く印象に残るアクションを起こさないといけないって考えてたらしいし、俺が悪になるか、尋が悪になるかの違いしかなかったわけだ。

あ、学校の方は尋が理事長に掛け合ってくれたらしく、俺が退学になるなんてことはないそうだ。

尋にはどんだけ借りを返せばいいのか。まじで破産するレベルだぞ。

「どうする、って言われてもねえ・・・」

どうする、とは瑞希ちゃんのことだろう。このまま元通りってわけにもいかないよな。

だって、悪の俺と正義の味方の瑞希ちゃんが今まで通り仲良くするってことは、共犯でしあってバラしてるようなもんだし。

もしバレたら、肉体的なイジメはもう起きないだろうけど、今度は陰湿なイジメが始まりそうな気がする。

「俺は能力の後遺症か何かで瑞希ちゃんに関する記憶を無くしてるってのはどうだ？」

他人になる。これがきつと、最良の手段だと俺は思う。

『無理がありますね・・・』

電話越しにため息をつく尋。

それを押し通すのが尋の仕事な。

期待を込めてそう言うと、尋は嫌々ながらも了承してくれた。

「じゃあ、頼んだ」

『はいはい・・・では、いい夢を』

プーツ、プーツという電子音と、微かに聞こえた尋のため息に苦笑する。

「お前もいい夢見れるといいな」

一人呟いた俺は、携帯をたたむと、ベッドに仰向け寝ころんだ。

まだ22時にもなっていないというのに、睡魔が襲ってきた。

————コンコン。突然、控えめに部屋のドアがノックされる。
俺の頭は急激に冷めた。

☆☆☆☆

誰かが俺の部屋を訪ねてくる。そんなこと今まであっただろうか？
と思いつつ、それが誰かは心当たりがあった。

「……開いてるよ」

部屋に入れるか悩んだけど、入れなかった後の方が怖いので、体を
起こしてそう返事をした。

ゆつくりとドアを開いて入ってきたのは、今朝ぶりに顔を合わせる
————三女の相良 香撫だった。

何かを聞いたそうな顔をしている。

まあ、そうだろうな。

今朝のゴタゴタの事情についてか、非現実的な俺の力についてか。

「あのっ……」

声から緊張が伝わってくる。まあ兄妹だといっても、血は繋がっていないし、今まで兄妹ととして接したこともないからな。

俺たちはまだ他人といっても可笑しくない。

「あの、この前はありがとうございました……えっと」

俺の顔色を窺うような態度に小さく笑いがもれる。

「どうして、笑うんですか」

むっと唇を尖らせる妹。表情が豊かで、瑞希ちゃんみたいな娘だな。

「いや、ごめん」

俺は軽く謝ると、わざわざ俺の部屋を訪ねてきた理由を問う。

「それで、急にどうしたの」

ほかの姉妹に見つかる前に早く、と急かす。

一つ頷いた妹は、真剣な面もちで口を開いた。

「学校でのこと」

やはりそうきたか。

「瑞希ちゃんがいじめられてたの知ってて、私何も出来なかったから。だからそのお礼を言おうと思ったの」

「別に、お礼なんて言われる筋合いはないんだけどな。俺はただ、ちょっとした自己満足の為に————」

「嘘」

「…………いや、別に嘘なんかついてな————」

「嘘。お兄ちゃんは嘘ついてる」

ジッと見つめられる。香撫の黒い瞳の奥には確信みたいなものがあった。

「私、わかるんだよそういうの。嘘とか、本当とか」

……………へえ。

たぶん、妹は冗談でそう言っているのではないだろう。俺の勘がそう告げている。

「そうか。なら妹様には正直に話そうかな」

ペラペラと口が動いたのはきつと、誰かに聞いて欲しかったんだ。知っていて欲しかったんだ。俺が他人の為に頑張ったんだって事実を。

本当の俺を。

「私の力、怖くないんですね」

俺の愚痴にも似た言葉を聞いた妹はそう言った。

瑞希ちゃんの為とはいえ酷いことをした。しかし、妹はそれについては何も触れてこなかった。

咎められるかと思った俺は、拍子抜けしつつ妹の言葉にうなづく。

「だって、そんなの見飽きたし」

少し嘘をついた。飽きるほど見たことはない。けど、不思議な力を持った奴らがいるのは知っている。

「だから、別に何とも思わないよ」

俺がそう言うと、妹は俯うつむいた。数秒経って顔を上げた妹は、どこか嬉しそうな顔をしている。

「妹って呼ぶの、止めてくれませんか？」

「え．．．．？」

俺って、実はそこまで嫌われていたのか？

突然の言葉にポカンとなる。

「香撫でいいです。そう呼んでください」

．．．．よくわからんな、こいつ。急に名前で呼べとか。

まあ、どーでもいいか。他人の考えなんて、予想で当てれるような簡単なものじゃないからな。

俺が頷くと、香撫は嬉しそうに部屋を出て行った。

結局、香撫が何のためにこの部屋に来たのか俺にはさっぱり理解できなかったが．．．．でも、悪くない気分だ。

この気分が何なのかは深く考えないことにする。理由は簡単だ。自分の弱さを認めたくない意地のようなものが、まだ俺の中にもある

から。

認めてしまうと、俺がどれだけ寂しがり屋で————いや、何でもない。何でもないから。

自分にそう言い聞かせて部屋の電気を消す。

今日はいい夢が見れそうだ。

第十一話 迫る強敵

「……嫌な予感がする、と意味深に呟いてみたり」

帰宅中だった少女は足をとめてぼそりと呟いた。

もう春も終わりだというのに、その日の風はとても冷たい。

眉を少し隠すくらいの、ピンクの髪がさらりと揺れる。

眠そうな目で見上げた少女は、小さく息をはいた。

本当に、あの人はなんて不幸なんだろう。

少女————如月 九>きさらぎ このくはクラスメイトの少年を思いながら笑った。

彼が持っている何かが不幸を呼んでいるのだ。的中率90%の未来予知が出来る九が、唯一未来を見通せない人物。

その人物の未来は不確定要素だらけで、ぐるぐると絡まり合い捻れ

ている。

しかし、そこが九の心をくすぐった。初めて出会ったのは中学の時か。

クラスで浮いている彼を、友達に言われて視たのが彼という存在を知ったきっかけだった。

彼は、私のことなんか知らなかったけど、私はずっと彼を見ていたのだ————とかなんとか。少し恥ずかしいことを考えてみる。

実際に中学の時の彼は私など眼中になかっただろうし、あったとしても関わりは持ってくれなかっただろう。

中学の時の彼は、どこか他人と触れ合うのを極端に嫌っている節があった、というのは彼をずっと観察していた私だから気づけたのだ。

そして私は彼を追うように高校に入学した。

未来が解るといえるのは良いことばかりではないのだ。

なんといっても一番の問題は—————退屈。

贅沢な悩みなのは理解している。けれど、人というものは退屈に耐えられない生き物なのだ。

高校に入学して彼は変わった。坂上 尋のおかげであろう事は察することができる。

坂上 尋も、未来を見通しにくいのが、的中率せいぜい50%といったところか。

やはり彼にはかなわないのだ。

だから私の興味は彼にしか向かない。彼以外は興味がない。

不意に熱くなってきた胸に手を当てる。まだ女性の象徴と言えるほど成長してはいないが、これからなんだ、これから。

「そろそろ、限界かもね」

わざとらしく作っている口調ではなく、素の自分が呟く。

限界なのだ。彼を見ているだけというのも、いつしか芽生えていた

熱い感情を抑え込むのも。

「雅＞まさく・・・」

少女は切なげに息を漏らした。

☆☆☆☆

「嫌な予感がするな」

俺がそう呟くと、隣にいる尋は大変嬉しそうに笑いやがった。

「それはそれは、頑張ってください」

殴りたくなる衝動を抑えつつ、視線を動かす。

瑞希ちゃん的一件でそうとうストレスがたまっているのか、尋が俺

をいじる頻度が増えている。

俺のストレスは————奴らにぶつけよう。

視界の端にとらえた黒い異形を追う。

影と俺たちが呼んでいる異形は、路地裏にひっそりと隠れているが多い。

まだ夜の9時を回ったばかりだから、影は眠って獲物が路地裏に入り込んでくるのを待っているのだ。

案の定、俺が路地裏に足を踏み入れた瞬間、暗い路地裏に二つの赤い光が灯った。

そして、すぐに影のうなり声が聞こえてくる。まるで犬が威嚇するよううなり声だ。

「はいはい。こっちは忙しいからさっさと終わらせるよ」

俺は赤い光を頼りに、その周辺を一気に捻りあげる。

影から悲鳴のようなものが聞こえて、その気配は無くなった。

小さく息をはき、路地裏からショッピングモールの表通りへと戻る。

待っていた尋が、お疲れさまですと労いの言葉をかけてきたので、右手を上げてそれに答えた。

「まったく。この数はなんなんだよ」

瑞希ちゃんの件などで、だいぶ部活をサボっていたせい、影の数が多い。

今日だけでもう10は狩った。

しかも全部犬に酷似した型。何かない方がおかしい。

「ふむ……司令官級がいるのかもしれませんがねこの辺りに」

俺も同意するように頷く。

影には階級があり、主に動物なんかを象っているのが兵士級、人と獣が混じったような奴らを司令官級と呼んでいる。

その実力は基本的には雲泥の差だ。もちろん例外はある。

兵士級でも、生物を大量に喰っているヤツは司令官級の実力を持っている場合がある。

司令官級の上もいるらしいが、師匠曰く、滅多に会えるものじゃないから覚える必要はないと言われた。

確かに司令官級でも、前回戦ったのは半年以上前だ。

その上となると、確かに遭遇率はかなり低いだろう。

どちらにしろ、今日は遅くまで帰れないようだ。

影が本格的に動き出すのは、深夜0時から深夜3時まで。

その間に、司令官級がいるという可能性を潰さなければならないだろう。

「なあ、尋」

「・・・・・・？」

「瑞希ちゃんは元気でやってるか？」

突然の質問にきょとんとした尋は、小さく笑い出した。

「・・・・・・そこで笑うか？」

不機嫌そうに言う、尋は反省の色が見えないいつもの笑顔で謝った。

「すみません。いや、雅君がそこまで瑞希のことを気にかけてくれていたとは」

「俺は別に、他人を思いやれないほど冷たい男じゃないと・・・・・・思いたい」

そこに他人と知り合いの差はもちろんあるけど、知り合いに冷たく出来るほど、俺は人間を辞めてはいない。

瑞希ちゃんの件が解決してから3日。

あれから瑞希ちゃんとは一度も会ってないし、俺も出来るだけ会うのを避けてるけど、やっぱり瑞希ちゃんのイジメがまた始まってないかとか気になるじゃん。

「おかげさまで、だいぶ改善されてきましたよ。瑞希もよく笑うようになってきましたし」

「……それだけ聞ければいいや」

俺はそう言って苦笑する。

あれから何が変わっただろうか。瑞希ちゃんのクラスメイトが、俺を見た瞬間青ざめて逃げる事とか？

他には、香撫のやつが家でもよく話しかけてくるようになった。もちろん、上の二人には見つからないように。

ま、このくらいだろうな。うん。

色々動いて何も変わらなかったら虚>むなくしいだけだしなー。

とりあえず深夜0時になるまではだいぶ時間がある。お腹がこれ以上鳴く前に、腹ごしらえでもしておかなければ。

「マクドナ○ド安定ですかね？」

同じくお腹が空いてきたのか、尋が提案してくる。

俺はすぐさまそれに同意。と、不意に携帯が振動する。

『お兄ちゃん、今日遅いの？』

妹からのメールに、じわりと胸の奥が暖かくなった。

悪い、と返事を返し、パタリと携帯を閉じる。

熱い気持ちが溢れないように、俺は拳を強く握った。

第十二話 司令官級

闇に無数の赤が蠢く。

深夜の1時30分を回った頃。ショッピングモールを歩いていた俺と尋は、すぐに背中を合わせて臨戦態勢をとった。

「……多いな」

俺の呟きに、尋が後ろで頷く気配を感じる。

わりと田舎にあるこの町のショッピングモールは、0時を回った頃には9割の店が閉まる。

人通りはほぼないに等しいが、0ではないわけだ。

つまり、誰かに見つかる前に影を殲滅しなければならない。

「巻きでいくか」

「そうですね」

まず尋が、俺たち以外を拒絶する空間を創る。

しばらく待っていると、痺れを切らした影が飛びかかってきた。

もちろん尋の能力に阻まれる。近くまで迫ってきた影は、どいつも犬のような形をしていた。

俺の視界に入った影を、能力で捻りあげて消す。

そうやって単純作業を数分続けていると、蠢いていた影はいなくなつた。

小さく息をはき、先ほどから感じる強い気配を目指して歩く。

「司令官級よりだいぶ強そうですね」

珍しく緊張した表情を見せる尋。

「ま、なんとかなるだろ」

これは予想ではなく、経験に基づく答え。師匠に比べれば、この位は全然苦にならない。

軽く言葉を交わしながら歩き、ショッピングモールも終わりに近づいてきたとき、鼻に濃厚な鉄の匂いがついた。

「・・・尋！」

「大丈夫。問題ありません」

俺たちの町からショッピングモールに入り反対に抜けると、小さな川が流れている。

その先は森林生い茂る山があり、その山の中には神社がある。夏には祭りなどでかなり賑わう。

川に架かっている橋の真ん中で、月明かりを背に赤い目を光らせている生物がいた。

その生物は俺と尋を見るなり、ニヤリと笑う。

「ヲオオオオオオ！！」

遠吠えが空気を揺らし、俺と尋は唾をのんだ。

その姿はまさに————狼人間。

これは、久しぶりにヤバいかもな。

冷や汗が背中を流れた。

☆☆☆☆

能力。神の遺物は便利であるが色々と弱点も多い。

一番の問題は、多様しすぎると疲労感がたまることか。

能力の規模、能力を使う対象によって、その回数は変わるが、一定数以上使うごとに、身体に疲労感が蓄積されていく。

個人差もあるが、俺の場合は約30回能力を使うと、疲労感が1つたまる。

1つくらいでは、50mを全力疾走した程度のものだが、回数を重ねていくと身体が動かなくなることもある。

それでも十分チートな能力なわけだが、つまり何が言いたいかというと、能力は長期戦になりそうな場合は温存しなければならないということだ。

狼人間——人狼と言った方がカッコいいか。

人狼の攻撃を避けながら隙を窺う。

「ガウッ」

大振りした右手を避け、そこで出来た隙について人狼の身体を捻りあげる。

頭の中から雑巾を絞るように捻るイメージ。

「ガアアアアアッ！！」

人狼は涎を垂らしながらよろめいた。

しかし完全に捻りきれない。

「まじかよ……」

頬をひきつらせながら体制を整える。

———硬い。まさにその一言に尽きる。いや、まあ、ダメージを与えられただけでもいい方か。

世の中には、世界に干渉するはずのこの力を使っても傷一つつけるのが精一杯な化け物もいるわけで。

尋が俺の横に並び、人狼の存在そのものを拒絶する。しかし、人狼は苦しそうに吠えるだけで見た目には傷どころか、何の変化も見られない。

少し———本気を出そうか。数歩で人狼に距離を詰めた俺は、拳を握り人狼の身体に軽く当てる。

さらに能力を発動し、拳が触れた部分から力を解き放つ。

捻りとはつまり、回転の力だ。拳が触れた人狼は後ろに吹っ飛びながら扇風機のように回転する。

ぐしゃっと何かが潰れるような音とともに、血の匂いが広がった。

息をはきながら、尋と拳をぶつけ合う。柄にもなく頑張った俺は小さく呟いた。

「・・・だるい」

どこか遠くからサイレンの音が聞こえてくる。

俺と尋は逃げるようにこの場を去った。

☆☆☆☆

家に帰った俺はちゃっちゃと風呂に入りベッドにダイブした。

何もないところを捻るより、触れた部分を捻りあげる方がイメージも固まりやすいし威力も格段に違う。

しかし普通なら威力が強すぎるし、何より疲れるし使うことはないのだが、それほどの相手がこの町に現れたことにため息が出る。

そんなことを思いながら暗い天井を眺めていると眠気が襲ってきた。

明日も学校か————。鬱な気分になりながらも眠気に身を任せた。

☆☆☆☆

朝、学校へ向かっていると聞き覚えのある声にビクリと身体が反応する。

「おはようございます。雅君先輩っ」

俺は視線で一瞥すると、ため息をつく。瑞希ちゃんがっこにこと笑いながら近づいてきた。

この娘は、まったく人の気も知らないで————「雅君。にやけてますよ？」

にやけてんのはお前の方だろう。

……まあ、なんだ。記憶喪失作戦は見事に失敗したわけだ。しかも尋に作戦を伝えた翌日に。

まあ、放課後に部室に行って瑞希ちゃんが居ることに一切突っ込まなかった俺が悪いんだけどさ。

バレた時は瑞希ちゃんにすげー怒られたし泣かれた。

その場はなんとかだめて、俺はちゃんと説明したはずなんだけども。瑞希ちゃんが俺と仲良くし続ける危険性とかについて。

それでも瑞希ちゃんは、俺に話しかけるのを止めないし、一体何を考えてるのか。

これが鬱になる原因。原因のはずなのに・・・なぜかにやけが止まらない。

瑞希ちゃんを心配する反面、普通に接してくれる瑞希ちゃんの状態がともうれしい。

あんなに酷いことをしたのに、自分がまたいじめられるかもしれないのに。

「雅君先輩、むずかしー顔してます」

むむむ、と俺の顔をのぞき込んでくる瑞希ちゃん。

尋に視線で助けを求めると、にやにやと笑いながら俺たちから距離を置いた。

「ち、近いからっ」

どんどん顔を近づけてきて、息がかかるくらいまで近づいてきた瑞

希ちゃんから逃げるように後ずさる。

「雅君先輩には、二度も助けられました。私、恩返しをしたいんです」

二度……？俺が瑞希ちゃんを救ったのはこの前が初めてだよな？

「いや、いいよ。恩返しとかしてもらおう為にやったわけじゃないしさ」

頭に疑問符を浮かべながらも返事をする。

「よくないです。全然よくないですっ」

しつこい……このまま言い合ってもきくと瑞希ちゃんは納得しないだろう。

なら、一つだけ。人と接するのが苦手な俺が、自分一人じゃ絶対叶えられない願いを、手伝ってもらおうか。

「なら、一つだけ頼んでいい？」

尋も俺の頼みとやらの興味があるのか、近くまで戻ってきた。

「実は、さ。好きな人いるんだけど俺って告白とかそういうのよくわからないし。なんてーかアドバイスとかしてほしいかなあって」

あー恥ずかしい。

まくし立てるように早口で喋ったけど、めっちゃ恥ずかしい。

瑞希ちゃんが急に立ち止まる。様子を窺うと、瑞希ちゃんはぽかんと口を半開きにして固まっていた。

尋はと言えばため息をわざとらしく吐くし。

・・・どうなってんの？

第十二話 司令官級（後書き）

文を書くときの気分によってかなりムラが出来るのをどうにかしたいです・・・。

誤字脱字があれば以下略

第十三話 放課後の練習

「好きな人……」

ぼそりと呟く瑞希ちゃん。

俺は首を傾げつつ答える。

「俺に好きな人とかいたらおかしいかな？」

別に俺も思春期真っ盛りなわけで。確かに三次元の奴らは群れるし、うるさいし嫌いだ。

集団の中にいたら具合が悪くなるし、知らない人と話すのは精神的にきつい。

けど、別に全部を嫌ってるわけじゃないんだ。

それに、今のは単なる冗談。確かに彼女にときめいてしまったのは認めよう。

けど、それは所詮憧れでしかなく、告白なんてしたところで結果は見えてるからな。

「誰なんですか？ 雅君が好きになるような人なんて数人しか思い当たりませんが……」

顎に手を当てて考え始める尋。やけに楽しそうだなおい。

「……いや、やつぱさっきのはなかったことにしよう。好きっていうより憧れに近いしさ。告白なんて無理だし無謀だし」

俺はそう言って逃げるように走った。本当に何てこと口走ったんだ俺は。……死にたい。

☆☆☆☆

尋が教室に入ってきたのは、俺の顔の火照りがようやく冷めた頃だった。

尋は席につくなり、にやにやと笑いながら俺に話しかけてきた。

「ちなみに、さっきの好きな人は誰だったんですか？ 僕の予想では水島せんぼ—————」

とりあえず殴った。誰かに間違って聞かれたらどうするんだ。

「……どーしてそう思う」

じと目で睨むと、キザったらしく肩をすくめて尋はため息をはいた。

「簡単なことです。考えてみれば雅君の性癖—————属性にぴったり当てはまる人物が一人だけいたな、と」

そうだな。そういえば尋は、俺の好みとかをばっちり知ってやがる。逆もしかりなんだけどさ。

「リアルお嬢様、黒ニーソ、金髪、姉属性。ほら、一人しかいないでしょ？」

「……誰にも言うなよ」

俺は諦めたように呟く。バレてしまったらしいがない。

それに俺も、尋の性癖に当てはまる人物に心当たりがあるし、お互い様だろう。

まったく。二次元の中にしかないような属性を持ってるやつがゴロゴロしているこの学校は異常だ。

「それにしても、雅君が一目惚れするとは……いや、興味深いですね」

これ以上何か言ったら能力の発動も視野に入れるが？

「あはっ。わかりましたよ。これ以上詮索するのはやめときましよう」

それでコイツは何でこんなに楽しそうなんだろうな？むかつく。

俺はチャイムの音と共に、大きくため息をついた。

☆☆☆☆

「雅君先輩っ！私、頑張ります！」

ドアを勢いよく開いて部屋に入ってきた瑞希ちゃんはそう宣言した。

何を、とは考えなくてもわかるだろう。

今朝の俺の失言に対する答えを瑞希ちゃんは導き出したのだ。

「瑞希ちゃん、あれは冗談で————」

「まずは告白の台詞を考えましょう！」

瑞希ちゃんは人の話を聞いてない。テーブルの上にカードゲームを広げて一人で遊んでいる尋に視線を送り、助けを求める。首を左右に振られた。

どうやら尋でも瑞希ちゃんの暴走じみた行動を止められないらしい。

「そうだ！告白の練習相手は何人かいた方がいいですよねっ。私、誰か連れてきます！」

勢いよく部室を飛び出していく瑞希ちゃん。

前とはあからさまに違う、元気な様子に小さく安堵する。どうやら、瑞希ちゃんのイジメが再発しているということはなさそうだ。

しかし元気すぎるのもなあ……。

「尋。まじでどうにかしてくれ」

「雅君。言っておきますが、僕は家族の中で一番下っ端なのです。それは知っているでしょう？」

いや、知らねえよ。最近まで尋に妹がいることすら知らなかったん

だぞ？

「では知っておいたほうがいいですね。家族の中で僕の発言はほぼ意味がないに等しいのです」

「……言って悲しくないか？」

「もう慣れましたよ」

尋も苦勞してんだな。まあ、俺も負けてはいないんだが。

お互いに顔を見合わせて苦笑する。

しばらく経って賑やかな足音が聞こえてきた。

「お待たせしましたっ」

瑞希ちゃんの声。振り向いた俺は啞然とした。

瑞希ちゃんの連れてきたというメンバーがあまりにもカオスすぎたからだ。

「紹介しますねっ！まずこの子から」

見覚えのある顔。というか、瑞希ちゃんと仲良くなったんだな――
――じゃなくてっ！何でここにいるんだ。

混乱する頭で必死に考える。瑞希ちゃんは言った。告白の練習をする、と。

つまり、だ。

「紹介します。私のお友達第一号の相良香撫ちゃんですっ」

――俺は妹相手に告白の練習をしなければならぬということか？

呆れる俺を見て、とうとう尋が声を出して笑い始めた。しかも、他のメンツを見てみる。

妹と一緒に不良に絡まれていた女の子。それにピンク髪のクラスメイト。

何の罰ゲームなんだこれは。

俺の反応をどう思ったのか、瑞希ちゃんが顔を寄せてきた。

「もしかして、この中に雅君先輩の好きな人がいるんですか？」

ボソリと小さな声で呟く瑞希ちゃんに、いや、と否定の言葉を返す。

「二人とも、何してるのと言ってみる」

不機嫌そうに言葉を発したのはクラスメイトの如月九。

さては無理矢理連れてこられて機嫌をそこねたな。

まったく。子供っぽいのは身体だけじゃないってわけだ。

とかなんとか、皮肉たらしいことを考えるも、口には出さない。

「如月は何でここにいるんだ？」

「……私がいちゃ、ダメなの？」

悲しそうに俯く如月。

少しストレートすぎたか。

「そーいうわけじゃなくて、瑞希ちゃんと知り合いだったのかって話」

瑞希ちゃんに連れてこられたんだ。まったく面識がないというわけじゃないだろう。

「知り合いじゃない。たまたま聞こえたから」

いつものような口調でないことに違和感を感じる。

「雅が誰かに告白するって」

ゾッと背筋に寒気がはしった。何だ今の。

見つめ合う俺と如月の間に入って、瑞希ちゃんは両手を合わせてパ

チンと鳴らした。

「時間も限られてますし、さっそく始めましょう！」

何を？とは質問するまい。一応俺のためにやってくれてるわけだし、仮病を訴えて帰るわけにはいかない。

完全下校時刻が来るのを待つしかないってことか・・・。

17時を知らせるチャイムが、部室に響いた。

第十四話 告白——前日

無理だ。俺は早くもそう思った。

最初の相手は妹の香撫。順番はジャンケンで決めていた。

チラリと時計を見るも、時間は全然進んでおらずため息をつきたくなる。

「やっぱり無理だって。それに俺とコイツは————」

「雅君」

妹なんだし、と言おうとしたところで傍観者を気取っていた尋が割り込んできた。

「それは言わない方がいいと思いますよ？」

こそりと声を小さくして注意してくる尋の言葉に首を傾げる。

「でも、妹だってわかったら一人分は早く終わると思うんだが」

やれやれ、と息をはいた後、尋は呆れたような目で俺を見た。

「名字が違うと言うことは血が繋がっていないと自分たちから告白しているようなものです」

まあ、そうだろうな。

「・・・・・・・・だから何だって顔ですね」

・・・・・・・・待てよ。そういうことか。

尋のジト目から逃れるように思考して、ある考えに辿り着く。

「確かに、血の繋がっていない兄妹なんてバレたら香撫に迷惑かかるかもな」

やっぱり兄妹とはいえ、血の繋がらない男女が同じ家に住んでるって引かれそうだな。

それが原因で香撫がいじめとかにあったら大変だし。

「・・・まあ、そういうことにしておきましょう」

尋はそう言って自分の席に戻った。

「もしかして雅君先輩って・・・」

顔を上げて正面を向くと、俺の正面に椅子を置いて告白の練習相手をさせられている香撫も、その後ろで椅子を並べて座っていた三人も顔を青ざめていた。

「男の人が好きなんですか？」

瑞希ちゃんが震える声でそう呟く。

「・・・んなわけないだろ」

呆れたな。どうしてそんなことを・・・。

「だって、私たちと話すのつらそうなのにお兄ちゃんとは普通に話すし、私たちと話す時は目を反らすのにお兄ちゃんとは見つめ合うし」

・・・なるほど。笑えないなこれは。

どうやらいらぬ誤解が発生したようだ。ただ単に、尋以外の人に対して固有スキルの人見知りを発動していただけなのに。

「俺は普通に女の子が好きだ」

ただし、女の子と話すのは苦手だ。女の子というより付き合いが短いヤツと話すのが苦手なのだ。

そう説明するも、疑いの眼差しがなくならない。

どうしたもんか。

「雅は、クラスでも尋以外の人とあんまり喋っていない。もしかして雅は————」

「やめてくれ如月。気持ち悪くなる」

BL疑惑をかけられて気分いいヤツがいたらそいつはホモだ。真正のな。

「俺は普通に女の子が好きだって。ほら、こういう風に」

椅子から立ち上がり妹の手を取る。やっべえすげえ緊張するな。

家でも一定の距離以上は近づかないようにしている。だって香撫のやつすげーいい匂いがするんだよ。

「ほ、ほほほら。こうやって女の子の手とただで心臓バクバクだし顔真っ赤になるし」

やばい頭がクラクラしはじめた。自分でも何言ってるかよくわかんなくなってきたな……。だがしかし、BLだとは思われたくない。

よし決めた。やってやろうじゃねーか。どうせ振られるのは目に見えてるけど先輩に告白してやるよ。

その練習ってんならつき合ってやろうじゃねーか。

「あの、お、お兄ちゃん？」

香撫が上目遣いで俺を見てくる。どうして俺から手を掴まれても嫌がらないんだよ。

っと、これは練習だったか。勘違いするなよ俺。これはあくまで練習だ。

香撫の顔と、先輩の顔をだぶらせる。

自分でも、暴走気味なのは解っていた。けど、やけに頭の中はスッキリしている。

妙な感覚の中、俺は言葉を紡いだ。

「好きですっ。俺と付き合ってください」

今まで味わったことのないような緊張感が身を震わせる。

初めて影と対峙した時よりも、ずっと緊張する。

先輩の顔がぼやけて消え、香撫の顔が認識された時、少し冷静さを取り戻してきた。

これで一人目。さっさと終わらせて帰りたい。疲れ方がまじハンパないな・・・世界中の告白したことがある男女に敬意を払いつつ、リア充共を少しだけ見直した。

香撫を見ると、顔を真っ赤にしてあうあうと口を動かしていた。

「————たしも」

やっと声を出した香撫。告白されるのに慣れてそうな香撫も緊張したのかな？

練習だし、バツサリと振ってくれとありがたいな。その方が本番っぽくていいだろうし。

「私も、お兄ちゃんのこと好きっ!」

「————へ?」

まじで？まじで言ってるのか？いや、よく考えてみろ。これはただの練習だ。

練習なんだ。だけど、なんだろうな。心が満たされる。好きって一言を聞いただけで、なんでこんなに嬉しいんだろう。

香撫と目が合う。なんだこれ。吸い込まれるように身体が動く。

香撫をぎゅっとなしたい衝動に襲われる。

「雅君先輩っ！」

「雅！」

「先輩っ・・・！」

三つの声に呼び止められてハッとなる。あ、危ない。俺は今何をしようとしたんだ？三人とも焦ったようにこっちに寄ってくる。何だろう。

「むう・・・」

香撫はどこか怒ったように唇を尖らせた。

「せっかくいい感じだったのに」

香撫の言葉に、照れくさくなって視線を床に落とした。

確かにいい感じだった。俺が変な誤解をしそうなほどには。

その後も、同じように告白の練習をした。一番緊張したのは香撫の友達の子。

全然面識なかったし、緊張のしすぎで死ぬかと思った。少し話してわかったのは、香撫の友達——山梨咲——やまなしさくくちゃん
は相当の恥ずかしがり屋ってことくらいか。

きょどり方はんぱなかったし、俺も同じくらい挙動不審だったんだ
がな。

「今日はありがとう。色々」

お礼を言うと、それぞれがこちらこそ、とどこか嬉しそうに言った。

「とりあえず、明日にでも告白してみる」

結果は解ってるんだし、早い方がいい。せっかくみんなに手伝ってもらったんだし、やらないなんて選択肢はもう残されていないからな。

とりあえず家に帰って先輩を呼び出すために手紙でも書いてつと・・・んで、部活をして寝る。

完璧だな。

「というわけで、先に帰る」

「了解です。鍵は僕が閉めときますね」

俺は鞆を持って部室を飛び出した。

☆☆☆☆

もう寝るか、と布団に入り電気を消すと、コンコンと控えめに部屋のドアが叩かれた。

「入っていいよ」

俺の声とともにドアが開き、誰かが部屋の中に入ってくる気配がした。

電気をつけようとするも、つけないで、との言葉でそれをやめる。

ストンとベッドに誰かが座った。

「お兄ちゃん、明日がんばってね」

わざわざ応援しに来てくれたのか？でも、まあ、振られるのは解ってるしなんか申し訳ないなあ。

「そんなことないよ。お兄ちゃんなら、可能性あるよ」

悲しげに呟く香撫。

俺は首を傾げる。

「それじゃあ、おやすみ」

部屋を去ろうとする香撫に待ったをかける。

なんとなく、身体が動いた。ベッドから香撫が立ち上がる前に、俺の右手が香撫の頭に触れた。

柔らかな髪感触が心地よい。なんとなく、こうした方がいい気がしたのだ。

「おやすみ」

「……………うん」

どこか嬉しそうな香撫の声に、俺は頬をゆるませる。

何故か無性に妹もののエロゲをやりたくなり、尋にでも借りるか、とベッドに横になった。

第十五話 告白——そして（前書き）

いつの間にかお気に入り登録が100をこえてた・・・こんな稚拙な小説を呼んでくれる皆さんには感謝ですね！読者の皆さんまじ天使！

第十五話 告白——そして

ピ。ピ。ピ。ピ。——。

目覚ましが鳴ると同時に俺は身体を起こした。

朝の6時。いつもならまだ爆睡している時間だが、今日は早起しなくてはならない理由があるのだ。

そう。今日は人生で初めて告白する日。緊張のせいか寝不足気味で少々だるい身体を無理矢理動かして、学校に行く準備をする。

まずは先輩を呼び出すための手紙を渡さないといけないのだが、直接は個人的理由で却下。

ベタだが、先輩の下足箱に手紙を入れることにした。誰にも見られたくないし、学校に早く行くのはそのためだ。

ちやつちやつと準備をすませ、悩みに悩んで書いた手紙を鞆に入れる。

朝食を取ろうと台所へ向かうと、不運なことに長女と遭遇してしまった。

お互い何も言葉は交わさず、俺は食パンをレンジに突っ込んで焼き上げるのを待つ。

レンジは台所の後ろにあり、長女とは背中を向け合うかたちになった。

ジーツとレンジのダイヤルが動く音だけがやけに響く。

静けさをやぶったのは、意外にも長女だった。

「朝、早いわね。珍しい」

普通に話しかけてきたことに驚きつつ、チンツといい音を鳴らして停止したレンジから食パンを取り出す。

「……まあ、ね。ちよつと用事あるから」

その場で食パンをかじりながら返事を返す。

チラリと後ろをうかがうと、長女は三人分の弁当を作っていた。

へえ・・・と思わず関心する。

初対面で色々言われたし、会う度に文句しか言われたことがない。家事とかは香撫の方が似合ってるし、長女は意地っ張りだけど実は何も出来ないキャラってのが俺のイメージだったんだが。

「妹たちは料理下手だから。私がやるしかないの。料理好きだし」

俺のへえという言葉が聞こえたのか、長女は早口で説明する。

そうか、とただ相づちをうつ。長女の様子が今日はちょっとおかしい。

こんなに普通の会話を長女としたのは初めてだ。

「はいこれ」

長女が出してきたのはおかずの乗った皿。

「余ったから。捨てるのもったいないし、食べて」

やはり長女の様子がおかしい。熱でもあるんじゃないだろうか。

しかし、食パン1枚程度では全然満足出来ないのでありがたく頂戴する。

適当に手でつまんで口に放ると、思わず言葉がもれた。

「うまい・・・」

俺が作る料理の倍以上はうまい。こんな料理、久々に食べた。

「勘違いしないでよ。私はただ、香撫から明日だけはあんたに厳しくしないでって頼まれたからこうやって余り物を恵んでやってるだけ、別にあんたの存在を認めたとかそういうんじゃないんだから」

早口でそう言って、長女は台所から去っていった。

俺は苦笑いしつつ、あっという間におかずが消えた皿を洗うと、玄関へ向かった。

☆☆☆☆

『伝えたいことがあるんです。放課後、屋上に来てください』

先輩の下足箱に入れた手紙の内容は、ありきたりなものになった。
どうやら俺に文才はないらしい。

早くも、昼休みの開始を告げるチャイムが聞こえてきた。今日はや
けに時間が経つのが早い。

「どうです？調子は」

「最悪だよ。調子よさそうに見えるのか？もし見えるなら眼科に行
くことを勧めするね」

にやにやと笑いながら寄ってくる尋に嫌みをとばす。

「まあまあ、そう言わずに」

他愛もない話を尋と交わし、昼食をとる。

なぜか記憶が曖昧だ。

気がつくまで放課後になっていた。

「こんなに緊張する人間だったとはな・・・」

屋上に来た俺は、落下防止のフェンスに体重を寄せながらため息をつく。

新たな自分の一面を発見して喜ぶべきなのか？なんてつまらない問答を一人でしているうちに、屋上のドアがゆっくりと開いた。

憧れの先輩————水島先輩が現れたのだ。

長い金髪に、絶対領域を作り出している黒ニーソが眩しい。

整っているが、無表情な顔。やはり先輩は最高だ————けど、何か違和感がある。

なんというか、既視感にも似た何か。

「これ」

水島先輩は手紙を出した。俺は緊張しながらうなずき、昨日必死で考えた言葉を紡ぐ。

「俺、水島先輩のことが好きなんです。よかったら俺と——」

「何で？」

水島先輩は真剣な表情で俺を見つめる。

「え、えつと理由は——」

理由は、なんだ？俺はただ、自分の好みに先輩がぴったり当てはまるから先輩が好きで——本当にそうなのだろうか。

「あなたのことは、知っていた」

先輩が突然そう言った。

「だってあなたは、私と同じだったから」

先輩の言葉に、ハッとなった。

そうだ。俺が先輩を好きになったのは、先輩が俺と同じだったから。

さきほど感じた既視感。俺はほぼ毎日、鏡にうつるあの表情を見ていたのだ。

尋に会う前の俺と、まったく同じ表情を。

だとしたら俺は————。

「・・・すみません先輩。何もないのに呼び出したりして」

気持ち急激に冷めた。最悪だな、俺。

そう。きっとあの時の俺は先輩を好きになってなどいなかったのだ。

俺はただ、先輩を憐れんだ。なんて可哀想な人。一人の孤独さは一番俺が知っている。

まるで自分自身を見ているようで。先輩が孤独じゃなくなれば俺も孤独じゃなくなるかもって。

ただそう思っていただけなのだ。最低だ俺は。

ただ自己満足のために、先輩を好きだったような気持ちになっていただけなんだ。

「……本当に、すみませんでした」

頭を下げる。土下座をしても、謝りきれない。俺は先輩にそれだけ酷いことをしたのだ。

「いい。気にしないで」

先輩は淡々と答える。

「私も、同じだったから」

そう言って先輩は出口へと向かった。

『私も、同じだったから』先輩の言葉が頭の中でリピートされる。

先輩は俺と違って、今でも孤独なのだ。

なら、俺に出来ることは何だろう。

考えるまでもなかった。尋は俺に何をしてくれた？

それが答えなのだ。去り際に見せた先輩の悲しそうな表情は、きつと助けを求めている。

俺がそうであったように。

孤独は、つらい。

だったら、俺がやるべきことはただ一つ。とても簡単で、とても難しい。

先輩と、友達になればいいんだ。

第十六話 世界が終わる日

友達の定義とはなんだろうか———。

俺は先輩を追いかけながらそんなことを考えていた。

人によって考え方は様々だろう。俺の考えはこうだ。俺が相手を友達だと思っている———それだけ。

そこに、相手も自分のことを友達だと思っていてくれればなおよし、だ。

だから俺は先輩を友達と思わなければならない。けど、俺は先輩のことを何も知らない。

臆病な俺は、知らない相手を友達と言い張れるほどの勇気はないし、傲慢でもない。

だからまず、先輩のことを知って———。

けど、俺の考えは甘かったのだ。人は独りでは生きていけない。特

にまだまだ子供な俺たちの年代は、誰かしら人と接しないと、すぐに壊れてしまう。

それは壊れかけていた俺がよく知っていたはずなのに――――。

この町には、悪魔が存在する。影と呼ばれる異形で、呼ばれ方は様々。妖怪や化け物等。

この町は、死の誘惑で一杯だ。影は弱った人を自分の領域に誘い込み、喰らう。

校門のところで見つけた先輩の背中に、黒い影が見えた。夜中でもないのに、影存在している。

これは初めての経験だ。影は夜の暗闇でしか生きていけないはずだが――――いや、そんなことはどうでもいい。

俺は人目をはばからず、全力で走る。

「先輩ッ！」

声に、先輩が振り返る。

「た、すけ」

瞬間、先輩が消えた。影も残さずに。

何が起こったのか、理解出来なかった。いや、理解をしたくなかった。

先輩は、影に喰われたのだ。俺の目の前で。

俺は助けられなかった。いつからだ。いつから先輩は影に憑かれていた？何で俺はそれに気づかなかった？

膝をつき、うなだれる。

下校中の生徒たちが何事かと俺を見て立ち止まる。

俺は思い切り地面に自分の頭をぶつけた。痛い。けどそれがどうした。

苛立つ。自分の不甲斐なさに。影の気配に気づかなかった自分の弱

さに。

何のために師匠から学んだ。誰かを守る為じゃないのか。人を傷つけてしまった罪滅ぼしをする為じゃないのか。

考えればいくらでも自分を攻める言葉が浮かんでくる。しかし、一度影に喰われた人は、二度と戻ってこないのだ。

存在ごと喰われた人は、皆の記憶から消える。先輩は誰の記憶にも残らない。誰のせいだ？俺のせいだ。

誰かの悲鳴が聞こえる。誰かが駆け寄ってくる足音が聞こえる。

頭を地面にぶつけ、血がいい感じで抜けると冷静さが戻ってきた。

「大丈夫か！？」

無理矢理起こされた。顔を見ると体育の教師だ。何でこいつはこんなに焦っているんだ？まあ、校門前で自分で頭を地面にぶつけて流血しているやつがいれば当たり前か。

突然の出来事に、心の整理がつかない。しかし、頭の中はすっきり

していて気持ちがいい。

ゆっくり視線を動かし、固まった。

何だアレは。

それは夕方の空にうごめいていた。まるで空を埋め尽くすように。

茜色の太陽は見えない。黒一色に染まっている沢山の黒に空が覆われているから。

何故、気づかなかった？こんなに近くに、こんな沢山の影が蠢いているのに。

体育教師は、俺の視線の先を見て、首を傾げる。

どうやら一般人には見えていないらしい。

「雅君！」

尋たちが駆けてくる。視線は俺にしか向いていない。どうやら尋ですら気がついていないらしい。

何だこれは。一体何が起きて――――。

「間に合わなかったか」

風が吹いた。聞き覚えのある声と、懐かしい匂いがした。

校門のところに、以前と全然変わらない黒い髪を揺らして立つ女性
がいた。

髪と同じく黒いマントに身をつつみ、不適に笑っている。

「「師匠！」」

俺と尋がそう呼ぶと、その女性は、一瞬でこちらまでの距離をつめ
た。

体育教師が驚いて尻餅をつく。

「師匠、いつこっちに帰ってきて――――」

「師匠、あいつらは？」

尋の言葉を遮り、俺は蠢く影を見る。

尋は何だと首を傾げるも、何かに気づいたように眉根を寄せて空を睨む。

そしてすぐに目を見開いた。

「……あれはいつから？」

震える声でそう呟く。

俺は首を振って答え、師匠を見る。

「さて。肉眼で確認できるようになったのは一週間前かな」

その事実、俺と尋は唾を飲んだ。

「ヤツらは一刻も早く、脅威になりえるものを消したいらしい」

脅威……神の遺物のことだろう。

「運のいいことに、今、この学校には全部のパーツがそろっている」

師匠は小さくため息をつく、俺と尋の頭を撫でた。

「離ればなれになるけど、頑張れよな。お前らは私の弟子なんだから」

寂しそうに、しかし満面の笑みを浮かべた師匠は影を見つめる。

何かなんだか理解できない。いったい、今何が起きていて師匠は何をしようとしてるのだろうか。

「この町は、世界の防衛線だ」

それを察してか、師匠がぽつりと話し始める。

「ここは世界の中心で、この世界の軸なんだ。だからヤツらはここを破壊しようとしている。けど、私たちには止める術も力もない」

だから、と言った師匠の足下に幾何学的な紋様が浮かび上がる。

「この世界は滅びる。ヤツらの餌になってな」

紋様は広がり、学校の敷地を埋め尽くした。

「あとは頼んだよ。やられっぱなしは性に合わないしさ。お前らは自慢の弟子なんだし、ガツンとヤツらを殴って皆の無念を晴らしてくれ」

「待ってください！師匠、僕は」

尋の言葉は最後まで続かなかった。俺たちは眩い光に包まれたのだ。

何も知らない生徒たちから、無数の悲鳴があがる。

俺はただ冷静に、目に焼き付けた。町を喰らう影と、師匠の笑顔を。

ゆっくりとまぶたが落ちる。眠くもないのに、ゆっくりと。

そして——俺たちの世界は影によって喰われた。

☆☆☆☆

いつだったか、師匠はこんなことを言っていた。

『異世界があるとしたら、行ってみたいか？』

俺は頷き、行ってみたいと言った。師匠は笑いながら俺の頭をポンと叩き、異世界の話をしてくれた。

そこには魔法があってドラゴンやエルフやらがいて、戦争がずっと続いていて、そして師匠の好きな人がいて——最初は冗談かと思った。師匠は、自分が異世界から来たのだと語ったからだ。

けど、師匠の懐かしむような目は嘘をついていなかった。それに、師匠が師匠であるなら、そんなものはささいなことなのだから。

だから俺と尋は師匠の世界の話で沢山聞いた。それを話している時の師匠は、誰よりも、何よりもキラキラしていて綺麗だったから。

けど、たぶん師匠は故郷の世界に帰ることなく死んだ。

帰りたいなら帰ればいいじゃん、という質問に、師匠は苦笑しながらこう言ったのだ。

『世界を移動するのは簡単じゃないんだ。人の命は膨大な魔力の塊。それがいくつも必要なんだ』

師匠の魔力は、人外レベルだった。だからこそ、師匠は自分を犠牲にして俺たちに未来を与えたのだろう。

そして俺は、また守れなかった。大切なものを。大切な人を。

このまま、眠ってしまいたい————「お、起きてください」

誰かが俺の頭を優しく叩いた。目をゆっくりと開くと、俺をのぞき込むように誰かが見ている。

「あの、こんなところで寝てたら危ないですよ？」

そこには、見たこともない女の子の顔があった。

第十六話 世界が終わる日（後書き）

急展開ですが、やっと本編に入れた感じですか。え？学園ラブコメ？
そんなのありません（大嘘）

そのうち、ちゃんとありますよー（棒読み）

第十七話 異世界とネコミミ

「ここは・・・？」

口にしてみるも、なんとなく予想は出来ていた。

女の子の頭部には、ぴよこんと二つの耳が飛び出ていたのだ。形から察するにネコミミだろう。

俺は師匠の力によって、影から喰われていく故郷からこの世界に飛ばされたのだ。

つまりここは異世界。おそらく師匠のいた世界だ。

・・・目を瞑ると、影が覆い尽くす真っ黒な空が、師匠の顔が頭に浮かんで泣きそうになる。なんて俺は無力なんだ。

「えっと、ここは鉄国＞くろがねこく＜のミヘンチルダ騎士養成学校です」

女の子は俺を見て首を傾げながらそう言った。

騎士養成学校。これは何かの偶然だろうか。

神の遺物を持ち、騎士の称号を持っている俺が騎士養成学校に運よく出現する。

偶然では、ないのだろう。きっと師匠が謀ったのだ。あの人にはやっぱりかなわないな。

「ここにいてことは、入学試験を受けに来たんですよね？・・・え、えっともしかして違うんですか？私の勘違いですか？あ、あの、あの、ごめんなさ——」

「いや、入学試験とやらを受けに来たんだよ」

時間がない。影のやつらはきつとまた、この世界も破壊しようと動くに違いない。

師匠は、俺たちに頼んだと言った。弟子の俺は、その頼みを聞き入れて強くなるしかない。あの影共を倒すために。

気になることは沢山ある。尋たちはどこに行ったのだろうかとか、何で言葉が通じるのだろうかとか。

何も知らない世界に飛ばされて不安もある。

しかし、立ち止まっていけないのだ。やるべきことはたくさんある。

「そ、そうなんですか。よかったあ・・・私、勘違いをしてよく怒られるから、またやっちゃったんじゃないかって思っちゃいました」

まずは、そうだな。女の子の表情が変わるとともに、微かに動いてる頭部の耳がどうなってるのかな——とか。

☆☆☆☆

ネコミミ女の子の名前はディレットリアというらしい。

彼女もこの学校に入学試験を受けに来たのだが、どうやら迷ってしまったんだとか。

そうやって学校の敷地内を歩き回っているうちに、地面にのびている俺を見つけたのだそうだ。

ちなみに、俺が倒れていた少し後ろの方には大きな池があり、もう少し後ろに召喚されていたら池の中にドボンだった。

というか師匠の狙いはたぶんそれだったな。あの人、イタズラめっちゃ好きだったし。

「ディレットリアさん？ いい加減機嫌なおしてくださいよ」

明らかに怒ってますよオーラを出しながら、俺の数歩前を歩くディレットリア。

いや、お互い自己紹介した後すぐに、好奇心に負けてディレットリアの耳を触ってしまった俺が悪いんだろうけどさ。

人見知りスキルにも勝るって、ネコミミは恐ろしいね。

まあ、ディレットリアの容姿がどこことなく日本人っぽく見えるのも人見知りスキルが発動しなかった原因の一つなんだろうけど。

「耳は、魔力を感知するとっても大事な場所です。だからその・・・
・敏感、なんです」

うう。そう言われると尚更悪いことをしたような気分になるな・・・
つまり俺は痴漢的な行動をしてしまったのか？

敏感ってことは、そうなるよな・・・こう見えても、陵辱ものとか無理矢理なのはあんまり好きじゃなかったんだけど、自分が似たようなことをやってしまうと、まじで自己嫌悪はんばないな。

でも、ネコミミの誘惑力が悪いんだよ！といいわけしてみる。皆だ
って目の前にネコミミの女の子がいたら耳触りたくなるだろうっ！

・・・ただの言い訳か。おとなしく謝るしかないよなあ。異世界
で初めての知り合いなんだし。

「・・・ごめん」

「・・・いいですよ、もう」

ディレットリアは小さく笑いながらこっちを振り向いた。

耳にばかり気がいってたけど、ちゃんと尻尾もあるのな。触ってみた……いや、自重自重。

「人族って、怖い人ばかりだと思ってたけどそうじゃないんですね」

まあ俺は人ではあるが、この世界の人間じゃないんだけどね。

「私のこと、ディリアって呼んでください。そっちの方が呼びやすいですね？」

「……俺のことは雅でいいよ」

何故か急に機嫌がよくなったディレットリア……ディリアはそう言って駆け出した。

「受付見つけましたー」

俺はそんなディリアの後ろをあわてて追いかけた。

☆☆☆☆

受付にいた人、金髪の金持ちですって感じの服着てる気障っぽい男は、デイリアを見てあからさまに厭らしい目つきになった。

「ほう。獣人がこの歴史あるミヘンチルダ騎士養成学校に来るとは珍しいな」

「え、えっとその……」

「いい身体をしているなあ。どうだ。今夜にでも俺の相手をしないか？」

「あう……それは……」

さて。二人の会話についていけないけどどうしたもんか。

「すみません。俺も受付したいんですけど」

とりあえず割り込んでみた。

そうやって初めて俺の存在に気づいたのか、金髪野郎はディリアの時とは明らかに違う表情で俺を迎えてくれた。

「どうぞこちらにお名前を。我らミヘンチルダ騎士養成学校は優秀な人材になりうる貴方を歓迎いたします。どうか試験合格目指して頑張ってくださいね」

態度の違いに驚きつつ、差し出された紙を見る。

・・・なんて書いてあるか読めねえ。しかもこの世界の字がわからん。

困惑した表情で紙を睨んでいると、ディリアが声をかけてきた。

「もしかして、読めないんですか？」

ついでに字も書けないんだが。

ディリアは嘆息して俺から紙を奪うと、サラサラと何かを書いていく。

「必要なのは名前だけですから、はい」

紙を受け取った俺は、それをそのまま受付の人に渡す。

「平民かよ畜生が」

舌打ちとともに、早く行けと急かす金髪。ムカつくからデイリアが終わるまで待つことにした。

なんだか色々暴言を言われたような気がしたけど、残念ながらスルースキルはカンストレベルなんでね。

そんな俺の態度が気に入らなかったのか、デイリアにすぐ紙を渡した金髪は、デイリアから紙を受け取るとまともや暴言を並べ始めた。

俺はデイリアに行こうか、と促しその場を去った。

試験会場である広場に受験者を導く矢印を追いながら歩く。

「どうかしたの？」

暗い顔をしているディリアに声をかけると、何を言ってるんだ的な視線で見られた。

「やっぱり、人が獣人に接する態度ってあれが普通なんだなーって落ち込んでるだけです」

「俺も人なんだが？」

そう言うと、ディリアは少しだけ笑った。

「マサは……変な人です」

獣人と人。どうせロクでもない隔たりがあるに違いない。よくある小説の設定だと、身分的な何かとか、そういうの。

「あ、見えましたよ。人がたくさんいますねっ」

元気を少し取り戻したのか、興奮気味なディリアが声をあげる。それに反して、俺のテンションはガタオチした。

目の前の広場には、500を超える人が集まっていたからだ。

すでに具合悪くなってきたぞおい。

受付のところからこの広場までは一本道だったし、今なら帰れるが・
・逃げてなんかいられないよな。

とりあえず深呼吸。気合いを入れて、俺は一步を踏み出した。

第十七話 異世界とネコミミ（後書き）

物語がタイトルっぽくなってきましたねー

第十八話 試験と決別（前書き）

文字数が足りないだと・・・。2000文字なんてなめプもいい
とこですね申し訳ない

第十八話 試験と決別

俺とデイリアは、人混みから数歩離れたところで立ち止まった。

どうやらこの広場みたいなところにいれば、何をしてもいいらしい。

木陰で腰を下ろしている者、何人かで雑談をしている者、と様々いる。

猫耳や犬耳もチラホラ見かけるし、エルフっぽいものもある。なんと
いうかファンタジー。

「マサ、大丈夫ですか？ 顔色悪いですけど」

「・・・あー、うん。ちょっと人混み苦手だね。少し距離とつて
れば大丈夫だから」

人と猫耳の組み合わせが珍しいのか、視線をちらほらと感じる。

それよりも、だ。

（誰もいないか・・・）

俺と同じようにこの敷地内に飛ばされたやつがいるかと思ったが、よくよく考えればクラスメイトの顔すら覚えてなかった。

『皆さん、注目してください』

どこからともなく声が聞こえてきた。皆の視線を辿ると、いつの間に設置されたのか、朝礼台のようなものの上に誰かが立っていた。

ここからは遠くてよく見えないが、スカートっぽいのをはいてるの
で女の子だろう。

『数ある騎士養成学校の中から我が校を選んできた皆様の眼力と幸運には、何か必然めいたものを感じませんか？残念なことにこの場にいる皆様の半数とは今日限りでお別れになるでしょうが、我が校は来年も再来年も生徒募集はおこなうつもりですので、必然とあらば私の在学中に顔を合わせる人もいるでしょう。』

声は魔法か何かで大きくしているのだろう。凜とした女の子の声ははっきりと俺の耳まで届いた。

『さて——時間というものは限られておりますので、長い前置きはこのあたりにして早速試験にとりかかりましょう。ルールは簡単です。我が校の校訓、騎士は何よりも強く在れ、に則り、今、ここに在る皆様でサバイバルをしていただきますしょう』

ざわ——と、静まっていた広場に一つの波がうまれた。急に戦えと言われておろおろとする者がほとんどだが、数人はきっちりと冷静に武器を構えた。

「端の方に行っとう」

混乱しながらの乱戦が予想されるので、ディリアを促し端の方へと向かう。人混みに巻き込まれるとかまじ勘弁してほしい。

「え？あの・・・今から戦うんじゃ」

「違うよ。ようするに、これは入学する生徒を絞るための試験なんだろう？」

つまり、だ。答えは戦うだけじゃないってこと。あんな大勢に混じって戦うなんてヤダし、俺は別の選択肢を選ぶね。

「生徒が一定数になるまで生き残ればいいんだ。戦ってもいいし、

逃げてもいい。簡単だろ？」

「逃げる、ですか」

何が不満なのか、ディリアはむーと唸りながら俺を見る。

「逃げるって、なんか卑怯です。騎士が逃げたりしていいんでしょ
うか」

逃げるが勝ちという言葉もあるだろ？ 戦って勝つことだけが勝ちじゃないんだよ。

煮え切らないようすのディリアを何とか言いくるめ、端の方へと向かう。

『ミヘンチルダ騎士養成学校、生徒代表ミルキシアン・フィオーレ・ラ・クロガネがここに戦いの開始を宣言します』

☆☆☆☆

予想通り、戦いとは呼べないほどの乱戦になった。誰も彼もが実力を出し切れないように見える中、確実に人は倒れていき選別が進む。

皆戦いに夢中なのか、俺たちの方には気づいてないようだ。

そうしてしばらく待っていると、ディリアは我慢の限界とばかりに飛び出していった。

「騎士たるもの、戦わずして勝ちはないです。マサのこと、見損ないました」

ディリアの去っていくときに見せた目は、よく知っていた。軽蔑。それがにじみ出ている目だった。

（騎士たるもの、ねえ・・・）

俺が知っている騎士は、人知れず戦い血に染まるだけの損な役割でしかないんだけど。

それに、なんだ。一人の方が気楽だしな。俺にはやらなければならぬことがたくさんある。

しばらくして、突然大きな鐘の音が響いた。さきほど戦いの開始を告げた女の人の声が聞こえてくる。

『皆様お疲れさまです——今立っている方々の、我がミヘンチルダ騎士養成学校を生徒代表の名をもって約束しましょう。係員が向かいますので、名前を確認して入学説明のある別の場所へと速やかに移動してください。皆様、本当におめでとうございます』

倒れている人たちの身体には、マーカーのような魔法陣が浮かんでいる。きちんと合格者不合格者を分けるためだろう。

どういう仕組みか気になるな……。しかし、先ほどからチラホラと目に映る魔法。これは是が非でも覚ええないといけないだろう。

神の遺物の能力だけで、影たちに勝てる気がしない。それに、尋もこうやって知識を深め自分が出て来ることを増やしていつて。そんな気がするんだ。

やってきた係員に名前を言って、案内されるがままついて行く。

チラリとディリアが見えたが、その表情はうかがえなかった。ディリアも生き残ったのか、なんて少し安心してしまった俺はお人好しなんだろうか。

一人苦笑して、係員の人から変な目で見られた。

ここから始まるのだ。この世界での、俺の物語が。

・・・なんてナレーション。厨二病乙だな。

第十九話 偉大なる魔法使い

係員から案内され到着したのは、大きな建物の中だった。

外観はまるで教会のような西洋風の建物。

中の広さは、一般的な高校の体育館と同じくらいか。

建物の中には、在校生らしき人も含め1000人はいる。

それでも結構余分なスペースがあるのし、天井も高くて風通しがいいので何とか具合の悪さは抑えられているけど、きつついな。

いい加減人が多いのにも慣れないと、集団戦とかあったらきついよな・・・なんて思っていると、人が全員入りきれたのか、建物に入るための唯一の扉が音をたてて閉じた。

そこからはまあ、なんというか。学長の挨拶だの眠くなることばかりだったので割愛。

小さく欠伸をしながら周りに視線を動かすと、俺の服装がだいぶ浮

いていることに気づいた。

皆さん、お洒落な服とか軍服とか、旅人っぽい格好とかそんなのばかり。

黒の学ランは相当目立つ。

目立つからと言って誰かが話しかけてきたりなんてことはなく、学長の話が終わり諸注意などが行われる。

どうやらここの学生には寮が用意されるらしい。しかも食事付き。

この世界には魔物がいるらしく、その討伐等を管理するギルドがある。テンプレな感じもするが、これでお金にも困らないだろう。

衣食住が確保されたわけだ。俺はかなり運が良かったらしいな。

尋たちは大丈夫だろうか。いや、尋なら俺より上手いことやってるだろうなきっと。

話が終わり、建物から係員の指示で出て寮へと向かう。

寮はもちろん相部屋だ。1000人も学生がいるんだし仕方ないんだろうけど、人見知りな俺としてはめっちゃきつい。

そのうち慣れるとは思うんだが。

俺の部屋は寮の15階。1階から魔法で15階まで移動できるんだぜ？エレベーターよりはるかに便利だ。

「どこのホテルだよ……」

思わず声が出る。一流とは言わないまでも、立派なホテル並に廊下は綺麗に掃除されていた。

部屋の扉も、広いくらいのスペースで等間隔に列んでいるし。

とりあえず、と自分の部屋に向かう。

微妙に緊張しつつ、部屋のドアを開くとそこには、見覚えのある顔が。

「校長……先生？」

高級なホテルの一室だと思えるくらいの広さと豪華さを兼ね備えた部屋の中に、ポツンと中年男性が立っていた。

「やあ、御代雅哉君」

間違いなく、そいつは、元の世界の、俺たちが通っていた学校の校長だった。

「君はわたしに聞きたいことがあるだろう？」

笑顔でそう言った校長に、俺はゆっくりと頷き返した。

☆☆☆☆

先生はなぜここに？

「君の師匠はあの時学校にいた教師を含め、生徒全員をこの世界に飛ばしたからね。いやはや、あの魔力量には驚きだったよ」

先生は俺や尋、師匠のことを知っていたんですか？

「もちろん。わたしはこう見えても君達側の人間だったからね。だから君達が事件を起こした時もそれを隠蔽することが出来たのさ」

俺以外の、尋や瑞希ちゃんたちはどうなったんですか？

「無事に到着しているよ。君の師匠がどこかしら人がいるところに皆を飛ばしたからね。まったく、彼女には本当にチートという言葉がピッタリだよ」

俺たちの元居た世界はどうなったんですか？

「消滅したよ。完全にね」

これから俺たちは何をしたらいいんですか？

「それは君が一番わかっているはずだよ」

・・・影は、あの異形はこの世界にもやってくるんでしょうか。

「来るよ。間違いなくね」

影って、一体何なんですか？

「さてね。あの異形の存在意義なんてどうでもいいさ。ただ確実なのは、あいつらは我々の敵だってことくらいか」

☆☆☆☆

「最後に、いいですか」

「ああ。わたしが理解できていることならね」

しばらく躊躇って、俺は口を開いた。

「俺たちが今より強くなれば、影に勝つことは出来ますか？」

———確信をついた。この答えは、俺がこの世界で生きるための意義であり目的でもある。

答えを聞きたくないと恐れる自分と、もう始めから理解ってるだろうと論す自分がいる。

圧倒的な力を、師匠でもどうにかできなかったあいづらを俺なんかがどうにか出来るわけがないんだ。

「わからない、かな」

校長は薄くなってきた頭を掻きながら苦笑いする。人の良さそうな目はしっかりと俺を捉えた。

「君達は若い。若さとは、それだけでどんな困難にも打ち勝てる可能性を秘めている」

そう言った校長は、腕時計をチラリと見て部屋に備え付けてある大きな窓の方へ向かう。

「君達の師匠は、昔はとっても病弱な女の子だった」

……いやいや、それはないだろ。

「本当のことさ。彼女は想いの力だけで病気を打ち破り、凄まじい魔力をその身に収めた」

校長は窓を開け放つと、どこからともなく左手にステッキサイズの棒を出現させた。

右手には黒いシルクハットを出現させ、頭に乗せる。その姿は、見たことがあった。

裏の世界の、異能者なら誰でも知っているような、そのレベルの有名な人だったからだ。

「頑張りたまえ雅哉君。わたしは、一人の魔法使いとして、君の学校の校長として信じているよ。君の、君達の想いの力を」

校長がパチンと指を鳴らすと、その姿は靄のように霞み、消え去った。

大魔法使い。世界で唯一、司令官級のずっと上……墜神＞だし
んく級を葬り、死者蘇生を成功させた偉大なる人物。

リナミカ・シセイカンゲ・ハレワ。

俺は開きっぱなしの窓を閉じて小さく笑った。

そんな偉大な人物が俺たちの学校の校長だった。それだけで色々納得がいかない疑問に片が付いた。

尋と俺が考えたしょうもない部活がなぜ許可をもらえたのか。なぜうちの学校にばかり異能者が集まるのか。影に関わる事件がなぜニユースにならないのか。

今になってようやく理解できた。

けど、それよりも重要なことがある。

可能性が見えたのだ。あの偉大なる魔法使いが俺たちの力を信じていると言った。

気休めかもしれない。しかし、可能性が見えた以上俺はやるしかない。

もう会えないであろう父さんの為にも、一人で俺たちを庇ってくれた師匠の為にも。そして、どこかで生真面目に頑張っているであろう尋の為にも。

俺は、暗くなってきた空に浮かぶ月を見ながら新たな決意をした。

第二十話 長女との再会

入学してから、約一ヶ月が経とうとしている。今学校で学んでいるのは、魔法と体術の基礎。

二年に進級とともに、どちらを極めるか決める。

体術は、師匠からかなりのレベルまで鍛えられたので苦はない。体力が少し落ちていたくらいか。

魔法は——うん。なんていうか俺にはむいてないっぽい。基礎的な魔法を覚えるのめっちゃ苦労したし、入学してすぐに行われた魔力量検査では赤点レベルの数値を叩き出した。

興味は滅茶苦茶あるんだが、向いてないんだから仕方ない。

とりあえず使える魔法は全部覚える。やれることはやっておかないと。

「さて、行きますかね」

小さく欠伸をして、服を着替える。寮は一部屋二人なのだが、好都合なことに俺のルームメイトはいない。

「いってきます」

返事はないけど、そう声をかけて校舎へ向かう。

せめて元の生活の習慣だけは、忘れたくないからな。

☆☆☆☆

クラスに入ると、先に来ていた生徒からの視線を幾つか感じたがすぐに俺から外れる。

貴族は貴族同士でグループを組み、平民は平民で組む。種族が人ではない者は同族と。

俺が浮くのは・・・まあ、仕方ないよなあ。

前の学校とあんまり変わらないから気にはしないけどさ。

40人が収まる教室の、一番奥の後ろの席に座る。教室自体は2階にあるため、窓を少し開くと風が頬に当たって気持ちいい。

この世界と俺たちの居た世界は時間の感覚が似ているらしく、一日二十四時間、三百六十五日。しかもこの国には四季があるという。

今は春を少し過ぎたあたりらしく、気温は少し暑いくらいである。

学校で用意された制服は長袖長ズボンなので尚更だ。夏にもこれを着ると思うと今から億劫になる。

「よし。席に着けー。朝の瞑想始めるぞー」

担任の声が聞こえてくる。犬耳のメガネをかけたおっさんだ。無精髭と白衣が、どこことなく相反しているように見える。

ざわざわと席に着くクラスメイトたち。そんな彼らを見ながら、俺はいつものように、瞑想という睡眠タイムを味わうべく目を瞑った。

☆☆☆☆

今日という日も、何事もなく過ぎていく。そう思っていたわけだが――問題は最後の授業。一年生6クラスによる合同の魔法の授業で起きた。

「何いちゃもんつけてんのよ！アンタが下手なのが悪いんでしょ！」

聞き覚えのある罵り声。まさか、と思いつつ騒ぎを遠巻きに眺めると、どっかの長女さんが明らかに貴族っぽい女三人組に喧嘩を売ってやがった。

俺と同じところに召喚されたのか、とか、なんでこの学校にとか色々頭をよぎったが、無事で良かったという気持ちが一番強かった。

一応家族なんだし、嫌な奴でもさ。心配くらいしたさ。ちよつとだけどな。

「わ、私を愚弄しましたねこの平民がつ！」

三人組のリーダーっぽいやつが顔を赤くしながら怒鳴り声を上げた。

「愚弄って何よ。アンタがミスって魔法失敗したってのに、近くで練習していただけの私がどうして悪いってことになるの？ねえ、貴族様。納得出来るように説明してみてよ。ねえってば」

……なんつうか、挑発しすぎだろううちの長女は。三女みたく普通の女の子っぽく出来ないのかね。

とりあえず傍観しようと思いをゆるめた途端、貴族様の怒りが頂点に達したらしい。まあ、貴族ってことで色々和我が儘してるからな。

『天は地に、地は天に——』

何か呪文を唱え始めた。途端教師が声を荒げる。

「やめなさいっ！それは貴女が使えるような魔法ではな——」

『我が名におき、太陽神の怒りを』

短い詠唱だった。貴族の女の子は手に持った杖を高く掲げる。

杖とは、魔法の力を増大させる特別な棒のことだ。

杖の数メートル上空に異常な魔力濃度が集まる。

大きな、火の固まりが出来た。それこそ、車一台よりも大きな火の固まりが。

「————ッ！」

長女は目を見開き、逃げようとする。魔法を発動させた女の子の取り巻きがそれを抑えた。アホかあいつら。巻き込まれるぞ。

「ど、どう？こんな魔法を使える私が、下手だって？・・・謝るなら、許してやるけど？」

金髪の髪を、余裕がなさそうな表情でかきあげながら女の子は言う。

そうか。取り巻きはこうなるって知ってたんだな。たぶん、こうやって強力な魔法を使って誰かを脅したことがあるんだろう。

「……あ、謝るからっ。ごめんなさい！」

長女の方は、挑発したりと態度は悪いが頭は悪くないようだ。まああんな火の玉見せつけられたら態度がどうのこうの言ってられないか。

「ふ、ふんっ。それでいいのよそれで」

女の子はそう言うとき目を瞑って深呼吸をする。気持ちを落ち着けて魔法に使う魔力を絶ち、魔法をキャンセルさせるのは最初に習う技術だ。

柔道でいうとこの受け身に近い。

「……う、そ」

怯えたように目をゆっくりと開き、女の子は慌て出す。

火の玉は小さくなるどころか、少しづつ大きさを増していった。

「止まらない、どうしよう！」

暴走だ。魔力を魔法に使うというのは、簡単に説明すれば水道の蛇口からバケツに水を溜めるイメージに近い。

自分が使えないはずの魔法を使うということは、つまり、それだけ魔力の放出が大きくなるのだ。

蛇口を、思い切り捻ってさらに捻ったらどうなるか。制御機能は壊れて、まさに「暴走」する。

生徒たちが離れていく。俺もそれに乗じようと足を動かすが――――
――視界に、我先にと逃げ出す先生の姿が。・・・・まじかよ。

女の子の取り巻きも逃げようとしているが、魔法を発動させている奴が心配なのかアタフタしている。

取り巻きにしてはいい奴らだな。

長女様はといえば――――キョロキョロと辺りを見回して助けを求めている。

ほっという逃げればいのは何やってんだ。

そして他の生徒たちはずっと遠くに離れこちらを見ている。魔法の訓練は外で行われているので最悪、長女と他三人が火の玉に押しつぶされてそれで終わるはずだ。

逃げないと——そう思って火の玉に背を向け始めて気づいた。俺以外、皆さん安全圏と呼べそうな位置にいらっしやる。

そして何というか、ね。振り返ってみると長女さんと目が合ってしまったわけですよ。

「あ、アンタ、どうしてここに……」

答えてる暇なんかねーよ。とりあえず今は逃げるしか「ねえ！」

いや、呼び止められても俺は気にしないから——「お願い……」

何をお願いだ畜生。一年間俺のことシカトしてた奴が、こういうときに限って助けてなんて言うつもりじゃねーだろうな。

「妹たち探すまでは死ねないの……だから、助けてっ！」

なんて身勝手な野郎だ。知らんぞ俺は。

足が、止まった。

意味がわからなかった。……いや、違う。意味はわかりたくなかった。

……これ以上家族を失いたくない。それもある。

三女の——香撫が長女が死んだと知った時の悲しむ顔は見たくない。それもある。けど——。

「みんなからの視線に吐き気がするからな。しょうがなくなだしょうがなく」

なんて言い訳を自分にして、フラつく金髪少女に声をかける。

「めんどくさいことするな、この貧乳野郎！」

驚いたような表情をする金髪さん。

「あ、あなた何を言ってるんですか！私のどこが——」

火の玉を睨みつける。そしてイメージした。

火の玉を捻って、この空間から消し去る。一瞬で玉から紐のように細まった火の玉は、まるで最初から存在していなかったかのように消え去った。

微かな何かが燃えるような臭いと、妙な沈黙だけが風に流されて空に舞った。

第二十一話 呼び出し

「だるっ……」

部屋に帰ってきた俺は小さく呟いた。

その後、魔法担任の先生から神の遺物で起こした力について説明を求められたのだ。

結局、なんと説明すればいいのかわからず曖昧なままで解放されたが。

それにしてもあの先生、生徒たちの前で俺に説明求めやがって。

そのせいか視線の嵐に晒された俺は精神までたっぷり疲れてしまった。

ぼふっとベッドに倒れ込み、風呂は明日入れてもらおうと思いつつ目を瞑る。

ちゃんとこの世界にもお風呂の文化があったことは、かなり助かった。しかもこの学校の風呂は天然温泉で24時間入れるのだ。

深夜遅かったりしたら掃除のおばちゃんと遭遇したりするんだけど、そこはまあ、仕方ないよね。

明日学校に行くことを鬱に思いつつ、そのまま睡魔に身を任せた。

☆☆☆☆

翌日。朝一で風呂に入った俺はさっぱりした気分で教室へと向かった。

教室に入ると、今までとは違った種類の視線がささる。まるで俺という人物を見極めようとするような視線だ。

さっぱりした気持ちは瞬間的になくなり、不快感がつのる。

ため息を微かにはいて、自分の席に座った。

朝の瞑想タイムが終わり、授業が進む。時折感じる視線にも慣れてきたのは昼休みの時間だった。

「……ちょっと、来なさい」

少し気持ちが楽になってきた所に声をかけられる。見なくても誰かわかった。

「……わかった」

俺も、色々話したいことがある。——この、長女さんとはな。

☆☆☆☆

長女——相良志穂の後ろに着いていく。校舎を出て、さらに男

子寮の方へと歩く。そしてさらに奥に行くと女子寮があり、そこで止まった。

「こ、こんにちは……」

女子寮の入り口で立ち止まった俺に話しかけてきたのは、左右の瞳の色が違うのが印象的な女の子だった。

朱と蒼の瞳は神秘的で、思わず息をのむ。

「で、とりあえずアンタが知ってる話、聞かせてもらえる？」

長女の生意気な言葉を聞き、現実に戻された俺はジト目で長女を見た。

あの時、助けを求めてきた女の子らしい長女は一体何だったのか。

「お願いたすけてー」

棒読みで呟く。長女は顔を赤くしながら俺の襟を鷲掴みにした。

「殴りたいの？」

「お願いたすけてー」

「……いい度胸じゃない」

そんなやりとりをしていると、女の子が小さく吹き出した。

「ぷふっ……ごめん、なさいっ。志穂ちゃんがそんな楽しそうにしているの初めて見るから」

「た、楽しそうなんかじゃないでしょっ！どこが楽しそうなのっ」

ああだこうだと言合いをする二人。

楽しそう、ね。ま、わからなくはないか。

元の世界の人に会って、会話する。たったそれだけのことなのに、嫌っていたはずの長女との会話が苦にならないんだからな。

「私の名前は、キリカ。志穂ちゃんとは、お友達、かな」

両目の色が違う女の子はそう自己紹介をした。

「志穂ちゃんと初めて会ったのは入学式の1ヶ月くらい前でね、私が夜散歩してたら志穂ちゃんが空から降ってきたの」

入学式の1ヶ月前？俺がこの世界に来たのとだいぶタイムラグがあるな。

「まあ、私のことはいい。それよりアンタ、何か知らないの？私たちがこの世界に来たことについてとか」

「……知らないって言ったら？」

「嘘だろうし、とりあえず殴る」

長女の顔には、俺が何か知っているという自信が現れていた。

「私、勘だけはいいの」

長女が俺を睨む。

はあっと息をはいた俺は、どこから話そうか、と模索し始めた。

☆☆☆☆

俺が手に入れた力。影の存在。そして師匠が命をかけて使った魔法。かいつまんで長女に話すと、長女はあっさりと納得した。

「信じるのか？ こんな話」

「信じるわよ。だってその方が色々考えないで楽だし。それに、嘘ついでるように見えないし」

意外な答えにぽかんとしていると、長女はいままで見せたことのない表情で微笑んだ。

「何変な顔してんのよ。バカみたい」

「誰だこいつ」

思わず口に出た。俺の知ってる長女はこんなヤツじゃなかった。いつもブスツとしてて、会うたびに文句をダラダラと言ってくる。

そんなイメージしかなかったんだが。

チラリと両目の色が違う彼女、キリカさんの方を見た。

「私が初めて会ったときは、大人しい女の子だったねー。私が何を聞いても答えてくれなくて」

「変なこと、言わないでよね」

二人の仲は、何年も知り合いで仲のいい友達のような雰囲気がある。

きつと長女がこの世界に来て、俺とこうやって出会うまでの間に色々あったのだろう。

「あ、そういえば名前聞いてませんでした」

キリカさんの言葉に、そういえばと思い自己紹介をする。

「俺の名前は御代雅哉。よろしく」

ま、友達になるとかはないんだけどさ。出会いはきつと積み重なって、いつか尋まで届く。なんとなくそんな予感がするんだよな。

だから俺は、こういった出会いを大切にしようと思う。人が苦手なのは、出来るだけ我慢しないと。

出来るだけ、ね。

第二十一話 呼び出し（後書き）

ぐだぐだ感が・・・新しい小説のネタばかり浮かんでくる罨。
そして土曜バイトはゆっくり考えれないからやめてー

第二十二話 武闘大会

あれから何日経っただろうか。特に長女やその友達のキリカとの接点もなく、日は確実に過ぎていく。

力は確実にについている。何度かあった実戦の授業では、神の遺物に頼らず、身体能力と微力な魔法の力だけで乗り切れた。

決戦の日はそう遠くない。そんな予感がなんとなく頭をよぎる。

「またお会いしましたわね。折り入って話が——こ、こらっ！待ちなさいっ」

「ミヤビ様を無視するとはなんと愚かなっ・・・」

変わったことといえば、長女とひと悶着あった金髪とその取り巻きが俺に執拗に絡んでくるようになったことくらいか。

とりあえず面倒なので無視してるが。

この世界にやってきて約半年——だいぶこの世界に慣れてきた俺の目に、ふと一枚の紙が止まった。

「騎士学校武闘大会？」

詳細を見て、思わず目を見開く。

参加資格は、騎士養成学校に通っていること。

つまり、この大会には色々な騎士たちが集まるわけだ。なんとなく。なんとなくだが、尋がこれに参加しているような、そんな気がした。

それに試したい。今自分がどこまでやれるのか。もちろん、全力で。

どうやらうちの学校は全員強制参加らしい。色々な国からも同規模で人が集められるようだ。そうとう大きな行事になるらしい。

猶予はあと1ヶ月程。さて、尋に会って笑われないように頑張りますかね。

☆☆☆☆

大会の会場がある都市、ブルムヘルクまでは歩いて約一週間。俺たちミヘンチルダ騎士養成学校の生徒は長い行列を作ってブルムヘルクへと向かった。

多少精神的に疲れたくらいで特に問題はなくブルムヘルクと到着したはいが、そこら中、人、人、人。人ばかりで俺の気分一気に悪くなった。

だいぶ人見知りも直したつもりだったがこれはきつい。早く泊まる宿に着くことを祈りつつフラフラ歩いていると、トン、と肩をたたかれた。

肩でもぶつかったのかと思い謝ろうと振り返ると、そこには――
――見覚えのある眠そうな目がこちらを見ていた。

「ひさし、ぶり――――雅」

思わず笑みがこぼれる。

元クラスメイト。如月九>きさらぎここのくの姿がそこにはあった。

☆☆☆☆

「雅、会えると思ってた」

まるで確信に満ちた言葉。いや、それはそうだろうな。なんたって如月は予知能力を持っていて、俺たちの世界ではわりと有名人だった。

きつと俺と会うことも知っていたのだろう。

「……おう」

素っ気ない返事だったかな。でもなんだ。改めて何か言おうとしても、何も思いつかないんだよね。

如月とゆっくり話をしたいと思った俺は、とりあえず宿の場所を把握して静かな所へと移動を開始する。

如月はそんな俺の数本後ろをちょこちょこと着いてくるだけだ。

「そういえば、瑞希も一緒だった。香撫も」

香撫・・・三女もかよっ！とりあえずこれは長女に報告してやるか。

それにしてもこいつら運いいなおい。そんだけ知り合いが固まってこの世界に来てれば、そう不安もなかったんだろうな。

羨ましく思いながらも、元の世界の友達と呼べるレベルで仲良かった如月と会えて本当に良かったと嬉しさがこみ上げてくる。

なんだかんだ言って寂しかったようだ。

「雅、私と会えて嬉しい？とか聞いてみる」

「嬉しいよ」

はっきりそう言うと、如月はピタリと足を止めた。

どうしたんだろ、と振り返ると、あまり表情を変えない如月が珍しく取り乱していた。

「……今のは、卑怯」

「何が？」

「……雅。なんか前より優しくなった」

「そうか？……まあ、そうかもな」

まあ、色々あったしな。こうやって心置きなく喋るの久しぶりだし、自然とそうなるのかも。

そこから会話が無くなったが、なんとなく心地いいような、むず痒いような静けさが続き、こういうのも悪くないな―なんて思ったり。

少しこじやれたカフェみたいな店を見つけた俺は、如月と共に店に入りこの世界に来てからのことをお互いに話し合った。

「それじゃ、また」

「・・・・・・・・うん」

気がつくと空はオレンジに染まっていた。この都市に到着したのが
昼前だったのでかなり話していたことになる。

瑞希ちゃんたちとは今度会うことにして、今日は別れることにした。

少し歩いて振り返ると、如月はずっとこちらを見ていた。苦笑しつ
つ、変わらないなあどこか安堵しながら、自分の宿へと足を進め
る。

意外と、尋と会えるのもそう時間がかからないだろうな、なんて思
いながら。

第二十三話 決勝

「香撫に会ったの?!」

長女に香撫のことを話すのは、如月と会った次の日。武闘大会予選当日になってしまった。

それまで会うタイミングなかったし、わざわざ長女に会いに行くのも面倒だったので今になったわけだ。

「ああ。たぶん会場にいるぞ」

俺がそう言うと、長女はキリカと共にどこかへ去っていった。

まあ家族と会えるんだ。急ぐ気持ちはわかる。

「もうすぐ長女の出番じゃなかったっけ」

☆☆☆☆

武闘大会の予選は100人の総当たりで行われる。

最後まで残った一人が本戦に出れるというシンプルな大会だ。

本戦出場できるのは36名。俺が出るブロックの予選出場者リスト見ても尋の名前はなかった。

つまり会うのは本戦か——なんて。バトルアニメの主人公みたいなことを考えながら自分の番を待つ。

『第6ブロック出場者は受付の前に集まってください』

魔法を使った放送が流れた。俺は腰を上げると指定された場所へと向かう。

誰からなんと言われようと、この大会は、全力で頑張ることに決めたんだ。

予選なんかで負けてられないな。

☆☆☆☆

敗北条件は、リングアウトになるか死ぬかギブアップするかだ。

人が蠢く小さな闘技場の上で軽く具合悪くなりながら開始の合図を待つ。

『さあ！早くも予選6戦目。今年は本戦出場者に一年生が多いですねー』

……司会者の人。早く試合開始してくれまじで。

そこから司会者の人と解説の人のしょうもないやりとりが少し交わされ、やっと試合開始の声がかけられた。

出場者の皆がどう動こうかと視線を動かしたり、一部のやつが早速魔法詠唱に入ったりしだしたが――――遅い。

闘技場の中心をねじり上げる。そしてそれを解放すると、元に戻ろうとする力が発生して風が起こった。

数人が飛ばされリングアウト。他は飛ばされないように必死になっている。

後はただ、全力で動いてリングの外に落としていくだけ。

微々たるものだが、魔法による身体強化のお陰か、師匠から鍛えられた俺の動きを捉えられる人はいなかった。

開始数分。試合は呆気ない幕閉じとなった。

俺はすぐに闘技場から降りると、ガヤガヤとうるさい外野を無視して自分が泊まっている宿へと帰った。

人の視線に晒されたせいで相当だるいのだ。

それに尋は勝つだろうし、試合なんて見る価値もないしな。

—————というわけで本戦に出場した俺は、尋と会う機会はなかったけど神の遺物というチートを使い呆気なく決勝へとやってきた。

対戦相手は、尋————の妹の瑞希ちゃん。

尋は先ほど、準決勝で瑞希ちゃんに負けた。

選手控え室にいた俺はそれもそれで尋らしいな、なんて苦笑しながら、闘技場へと足を進める。

「……よう」

「……お久しぶりです」

闘技場へ向かう時にふと出会ったソイツは、前と変わらないにこやかな笑みを顔に浮かべていた。

「決勝で雅君と、なんて思ってたんですけどね」

「妹に負けるとか、へたれの極みだなおい」

交わした言葉はそれだけ。尋は苦笑を浮かべながら。俺は嬉しさを隠しきれず思わず笑みがこぼれるのを抑えきれない。

俺は闘技場へ。尋は・・・まあたぶん観客席にでも行くのだろう。話すことはいっぱいあるけど、今は少しの言葉を交わすだけで良かった。

「頑張ってください」

「・・・・・・・・おう」

闘技場へ出た俺は、眩しさに目を細めながらリングの上の人物を見る。

「お久しぶりです雅君先輩っ」

ニコニコと微笑んでいる瑞希ちゃん。

どことなく悪魔の笑みに見えるのはきつと俺の気のせいだろう・・・
・むしろそうであってほしい。

「久しぶり」

リングに上がった俺に、瑞希ちゃんは笑みを崩さないまま問いかけた。

「雅君先輩。この試合でちょっとした賭をしませんか？」

第二十三話 決勝（後書き）

展開速度エ……。いや、ネタ切れとプロットなしのグダグダ感が堪らないのでスピード解決しようかなと

そしてわいてくる新しい物語の数々。どうしろと言うんだ

第二十四話 恋する乙女はどんなチートよりもチートである

「賭け、ね」

嫌な予感しかしないが、一応内容を聞いてみよう。

「雅君先輩と離ればなれになって、私気づいたんです」

瑞希ちゃんの瞳には、微かに狂気のような光が見えた。

「やっぱり、雅君先輩は私のものだって」

・・・この世界に来て何があったんだまじで。

きよろきよろと観客席を見渡し、尋を探す。身体強化を強め、視力を上げて尋を見つける。

『どうなってんの』

口を動かすと、尋が苦笑するのが見えた。よく通じたな。

（・・・失礼。この方が話すには楽ですし）

頭の中に尋の声が響いてきた。おお。これは便利な魔法だ。

（どうやら、何かリミッターが外れたようですね）

リミッター？何かを我慢してたってことか？

（雅君。女の子というものは恋に生きているのです）

ほうほう。

（会えなかった半年という期間に加え、いつ影がこの世界に来るか
わからない状況ですからね。他人のことを考える余裕がなくなった
のでしょう）

（つまりそれはどうということなんだ？）

（瑞希が好きなのは雅く—————）

ブツツとノイズのようなものが耳に響き、尋との通話が途切れた。

「そこから先は、自分で言います」

瑞希ちゃんはそう言ってにこりと微笑んだ。

今の俺と尋のやり取りをどうやってか聞いていたらしい。なんか笑顔が黒いんだが。

「大好きです、雅君先輩」

いつもの感じとは違う雰囲気を出す瑞希ちゃん。その目はかなり真剣だ。

・・・瑞希ちゃんが、俺を好き？

「雅君先輩は忘れてるかもしれないですけど、私が小学生の頃も雅君先輩に助けられたことがあるんです」

思いだそうと頭をフル回転させるも、ピンと来ない。

まあ、瑞希ちゃんが小学生ってことは、俺も小学生かもしくは中学に入学したての時か。

ちょうど黒歴史的なトコだし、あまり物事を考えないように生きてたからほぼ記憶にないんだよなあ。

「二度も助けられて、私思ったんです。私には、雅君先輩しかいないって」

なに言ってるんだ。瑞希ちゃんには尋もいるし、三女とも友達なんだろう？ そんなこと言うなよ。

「先輩、それとこれとは別ですよまったく・・・」

なんだその呆れ顔は。

言い返してやろうと口を開くと、絶妙なタイミングで試合開始の合図が鳴った。

「だから先輩。私が勝ったら——」

風が吹いた。

立っているのがつらくなる程の風だ。

どうやら瑞希ちゃんは、魔法の才能があったようだな。神の遺物の力に魔法。まじでチートだろこれ。

「……行きます」

風が目視出来るほどに一カ所に集まり始める。それは三日月型をとり、動き出した。

「うおっ!？」

ガガガガガと闘技場を削りながら飛んできたソレを横に動いて避ける。

よく見れば削れているのではなく、石で出来た闘技場は消失していた。

「当たったら死ぬだろ、コレ……」

愚痴を言っている暇などなかった。次々に風は飛んでくる。

危ねえ……。決勝まで来れたわけだよまったく。神の遺物と魔法の組み合わせはダメ絶対。

けどまあ、負けたらどうなるかわからんし、本気でやらせてもらうさ。

神の遺物チートを超える神の遺物チート。それが俺の力だ。

どの神の遺物よりも世界への干渉が強く、普通なら相殺するはずの神の遺物同士の衝突も、俺だけは例外なのだ。

力業で、無理やり風を捻り切る。驚く瑞希ちゃんに構わず、俺は体を動かした。

どんなに神の遺物の力を使おうと、俺に対してだけそれは無力だ。

「卑怯ですっ————雅君先輩の力は」

何とでも言うがいいさ。言っとくがこれは完璧な力じゃないんだぞ？

「————ッ！」

頬を風が微かに掠め、血が伝う。

風の魔法ってのはやっぱりチートだ。これじゃあ、想像出来ない、じゃないか。

そんな俺を見て何か思いついたのか、瑞希ちゃんが目を瞑り口を動かす。

ザワツと空気が揺れた。

魔法の才能がない俺でも感じれるほどの魔力がうねる。

「風よッ!!」

三日月型の風がいくつも精製される。

しかし、多数に風を作っているせいか一つ一つの威力が落ちているようで、とても、感知しにくい。

風は次第に俺の周りを取り囲むと、そこで一時停止した。

「はあ、はあ————私の全力です雅君先輩」

威力は低そうで、切り裂くだけの力はなさそうだが、打撲のようなダメージを残すくらいのことは出来るだろう。

これは————きつついな。

俺の力には、大きな弱点がある。俺の捻る力は、頭の中で想像することによって発動するのだ。

想像さえできればどんなところにも干渉出来る。

逆に言えば、想像出来ないものには干渉出来ない。不意打ちのような、気づかない攻撃には。

とりあえず今は俺の周り全体を捻って、俺が立っているこの場所を別の空間にすることくらいしか————「捕まえました」。

にやりと瑞希ちゃんが笑った。足下に違和感を感じて視線をやると、魔法陣のようなものが浮かんでいた。

周りの風で出来た三日月は、ブラフか……。やられたなまじで。

ピリツと足が痺れたと思ったら、そこから全身を痛みがはしった。
これは確か、魔物捕獲用の麻痺魔法———。

「先輩。私の勝ちですね」

やっぱ、卑怯だよな魔法。

そんなことが頭をよぎり、ぷつりと意識が途切れた。

第二十五話 旅立ち

真っ黒な闇の中に俺は立っていた。音も、空気の流れもない息の詰まるような闇の中に。

しかし不思議と気分は悪くなかった。ふと、微かな音が聞こえる。

耳をすますと、その音は次第にはっきりしてきた。誰かの声のようだ。

『ミツケタ・・・!!』

途端背中を冷たいものがはしった。この声は初めて聞く。けど、なんとなく誰の声かはわかった。

「・・・夢か」

ぼそりとつぶやいた。目の前には見知らぬ天井。身体は汗をかいていて気持ち悪い。

今のは間違いなく影。

元の世界で何度も戦ったあの気配に間違いない。

上半身を起こし、息を吸う。早まった鼓動が収まってくるのを感じて頭を働かせる。

見つかった。こんなにも早く。・・・そりゃそうか。武闘大会で惜しげもなく神の遺物の力を使ったのは俺だ。

しかし、まだ早すぎる。俺はアイツらに勝てるような強さを得てない。

ふんわりと心地よい風が開きっぱなしの窓から入ってくる。

『優勝したのはなんと女の子だ！数十年ぶりの快挙だぞこれはっ！さてさて、さっそく優勝者の瑞希ちゃんにお話を聞いてみましょう』

そんな放送が聞こえてくる。ここは武闘大会会場の医務室か何かか。

「・・・時間はないか」

一人呟き、いまだに痺れが残る体を無理矢理立たせる。

「行くのですか」

「・・・ああ」

いつから立っていたのか。出口のドアのところには尋が立っていた。

「みんなあなたに会えるのを楽しみにしていたんですよ？僕もまだ、話し足りない」

「影が俺たちの存在に気づいた」

ただの夢じゃない気がするんださっきのは。俺の勘がそう告げている。

なんてな。厨二くさすぎだろ俺。

苦笑していると、それをどう思ったのか尋も苦笑で返してきた。

「二人で行くんですよねもちろん」

「だな。ほかに誰かいると、甘えてしまいそうだし」

「……僕は残された彼女たちになんと言えればいいのか」

まあ確かに、瑞希ちゃんとかからボロクソ言われそうだな尋。

「頑張れ」

「まずは自分の命が心配ですよまったく」

ご愁傷様。いっそのこと尋も別口で行動起こせばいいのに。

「……いえ、僕はとりあえず師匠から教わった技術を、影殲滅に協力してくれそうな人たちに教えて戦力を増やすことにします」

そうか。尋は人に勉強とか教えるの得意だもんな。

……さて、時間が惜しいか。

「じゃ、行ってくる」

尋の前をゆつくりと通り過ぎてドアを開く。

俺は旅に出る。自分を高めるために。他の神の遺物を所持している人を探すために。

「じゃ、またな」

「ええ。また会いましょう」

名残惜しさに後ろ髪を引かれつつ、俺は武闘大会が行われているブルムヘルクの出口へと向かう。さあて、やれるだけやってみますか。

☆☆☆☆

「雅君先輩・・・っ!？」

やっと瑞希が来ましたか。これで全員ですかね。

先ほどまで雅君が寝ていた病室には、数人の女の子が集まっていた。瑞希、如月さん、雅君の家の三姉妹、それにこの世界の人が四名ほど。

「お兄ちゃん……これは一体」

これっていうのは、雅君が立てたフラグの数でしょうか？それとも空になっているベッドの中についてでしょうか。

……言わずもがな、後者ですね。

僕はもれそうになるため息を抑えて真実を口にする。

「雅君は、旅に出ました」

ざわっと空気が揺れ、殺気が部屋に満ちる。ち、ちよつと雅君。この展開は聞いていないのですが。

「お兄ちゃんは、雅君先輩が旅に出るのを黙って見ていたの？」

我が妹よ、どこで教育を間違ったのか。

「坂上尋。ちゃんと答えて」

何ですか、その解答によってはブチ殺すみたいなオーラは。

「あの馬鹿に色々と言いたいことがあるんですけど」

僕に言われてもですね、三姉妹の長女さん。

「……お兄ちゃん」

これ泣かしたら僕のせいになるんでしょうか。

「私をまたも侮辱して——許せませんわ」

「ああ、ミヤビ様をこれほどまで怒らせるとは」

「万死に値しますね」

あなた達は誰ですか一体。なぜその怒りを僕に向けているんでしょうね。

「あははっ。苦勞するね君も」

わ、笑うなっ！笑いですまされることではな————「お兄ちゃん」

ええ、逃げましたよもちろん。だって妹ながら、あの光のない目は怖すぎますからね。

命がけの鬼ごっこが、今始まった————なんてね。本当、洒落にならないですって。助けてください雅君っ！

第二十五話 旅立ち（後書き）

雅君の旅の内容は書いた方がいいですかね？すつとばして影との戦いに突入しようかと思ってるんですけど

第二十六話 集結の時

凍てつくような寒さが身に染みるこの世界の冬はさすがに辛かった。

俺には魔法の才がないし、身を暖める魔法すら使えないのだ。

「さって、と。久しぶりだなあ」

武闘大会で賑わっていた半年前と雰囲気は違うも、町並みはそう変わっていないかった。

そう。あれからもう半年も経つのだ。最初はミヘンチルダ騎士養成学校へ戻ろうと思ったが、影の狙いがこのブルムヘルクだとわかったのでここへ来た。

まあ、影に神の遺物の存在を察知されたのがこの街だしな。影がブルムヘルクを狙うのも納得がいく。

影の進行は始まっており、旅の途中で何度も対峙した。どうにもヤツら、前の世界にいた時よりもだいぶ強くなっているらしい。

「……さむっ」

一段と強い風に身を震わせた俺は、急いで適当な宿を探す。

冬といえどこの世界の人たちはたくましい。半袖で客寄せしてるおっさんとかいるし。考えられん。

適当な宿を探し、そういえば、と武闘大会の時俺たちの学校が泊まった宿を見つけて入る。多少でも慣れたところが落ち着くしね。

宿の受付のおばちゃんは俺を覚えていてくれたのか、軽く声をかけてくれた。そこで少し世間話をし、部屋へ向かう。

そういえば学校はどうなっているのだろうか。まあ、半年も無断欠席すれば退学にでもなってるんだろうなあ……。

「みんな元気かなあ」

尋や瑞希ちゃん。三姉妹に如月。早く会って話したい。積もる話がたくさんあるのだ。たとえばそう———他の神の遺物保持者についてとか。

いや、待て。確かに重要なことだが尋以外には話さない方がいい気がする。なんとなくだけど。

ぼふっと部屋のベッドに腰を下ろす。とりあえず一眠りでも、思っている、部屋の窓が開き風が侵入してきた。

「・・・・・・・・ちゃんと閉めてください、校長先生」

感じたことのある気配にそう声をかけると、窓がそっと閉じられた。

「なるほど、多少は成長したようだね」

風はゆっくりと人の形を成していく。

黒いシルクハットを深くかぶった校長先生は、嬉しそうに笑った。

「まあ、色々とありましたからね」

それに苦笑で答える。なんか物凄くいかつい魔物がうじゃうじゃいる森で迷った時に、嫌でも気配に敏感になってしまったのだ。

まあ、命がかかってたからな。

「で、どうだね？ 奴らに勝てそうかい？」

「そうですね・・・はっきり言って戦力不足です。でも、勝機はある。」

俺がそう答えると、校長はふむ、と何かを思案しだした。

「何の犠牲もなしに？」

それには無言で答える。何の犠牲もなしに奴らと戦うのは無理があるってことは校長先生もわかってるだろうに。

「まあ、いいでしょう。私はあなたともう一度話がしたかっただけですからね」

校長先生はそう言って立ち上がると、窓をそっと開けた。

「敵はすでにこの世界への浸食を始めています。決戦までもう一週間も残されていません」

もう時間がないのか。予想していたのより少しばかり早い決戦の時に苦笑する。

術は完成している。あとは俺の覚悟だけだ。

「ではまた会いましょう」

そう言い残して校長先生の姿は消えた。きっとあの人は気づいているだろうな、俺がやろうとしていることに。

今度は自分で窓を閉める。視線を少し下にずらすと、彼女たちの姿が見えた。

尋たちの方が彼女たちより早く着くと思ったけど、まあいいか。とりあえず宿の受付に、部屋を追加してもらおうと、俺は足を進めた。

第二十七話 修羅場

神の遺物。世界の法則すらねじ曲げるその力は、全部で12も存在している。

俺と尋、瑞希ちゃんで3つも揃っているわけだが、残り9つのうち所有者が全部女性だと誰が予想出来ただろうか。

ここまで言えば俺の苦労も少しはわかってくれると思う。全員が全員、素直に影との戦いに協力してくれる人ばかりではないのだ。

それはもう、本当に涙ぐましい努力でだな・・・。

「何が涙ぐましい努力よ、このたらし」

そうやって俺を睨むのは、高校生にもなってツインテイルが似合う神の遺物の保持者、御津神 満>みつかみ みちるくである。

厄介なことにコイツの力は、人の心を詠む力。俺が心の中で語っている独り言もモロバレなのである。つか俺にその力を使うなんて何度言えばわかってくれるのか。

「そりゃあ、アンタが影とかいう化け物を倒すのに仲間を集めてるってのは聞いてたけどさ。全員女の子だなんて聞いてなかったし、なんていうかその……」

集まってくれた9人をぐるりと見渡す。狭くはない部屋だが、これだけ集まれば多少は狭くなる。

それぞれの顔には嫉妬と嫉妬と、不安と嫉妬が入り交じっている。何で嫉妬成分が強いかは気にしないことにしてくれ。

仲間になってもらう為に色々とフラグを建てたのは間違いなく俺の意志だ。

さてどうするか。尋みたく顔に恵まれなかった俺だが、どうやら口先だけは結婚詐欺師になれるレベルらしい。ここは得意の言葉を駆使して————いや、そういえば一人、真実を見極める力を持ったヤツがいたな……くっ、これだから人外の集団は。

「とりあえず、話を聞こう」

威圧的にそう言ってきたのは前の世界で高校女子柔道の全国トップを三年間連続でとるといふ快挙を成し遂げた流宮 遙<るみや は

るかく先輩だ。

あらゆるものを破壊する力を持っている彼女の鋭い視線に、俺は顔をひきつらせながら頷いた。

☆☆☆☆

影について詳しく説明し、そして影を倒すには全員の力が必要で、仕方なく皆さんとお近づきになったんですよなんて、土下座なんかをオプシオンに説明したわけだが、場の空気は明らかに悪い方へと転がっているわけだ。

そりゃ、恋愛感情とかを利用してたわけだからその気持ちには十分にわかる。どれだけ謝っても謝り足りないことも。だから俺が出来ることならなんでもやるつもりだ。

「な、なんでもってことは、先輩とあんなことやこんなことも出来るっことですよね……？」

サイドテイルに幼さが残る顔でそんなことを言ったのは楠川 香苗
＞くすかわ かなえく。彼女の能力はイメージを具現化するとかい
うまじチート能力。妄想癖が強いのはその副作用なのだろうか。

ざわっと部屋が喧騒に包まれる。あのー皆さん。なんで真剣な表情
で悩み始めるんでしょうか。

極度の人見知りは、緩和はされたが治ったわけじゃないんだ。そう
いうことをしたくないと言えば嘘になるが、出会って一年も経って
ない人と触れ合うのは嫌だ。吐き気がする。

この場から逃げ出すという選択肢が頭に浮かぶが、なんとか振り払
う。騙すみたいで悪いが、全ては影を倒すまでだ。それまではどん
な妄想をされようと笑顔で受け流そう。

そんな俺をじっと見つめる女の子、綾知 優＞あやち ゆうく。赤
いリボンが特徴の彼女が、真実を見極める力を持っている。

ちょっと綾知さん。ここは俺のことを想って内密にしてほしいかな
・・・なんて。

「雅が嘘をついた」

どこか如月と似たようなしゃべり方だなーとか現実逃避してみる。
ああーもう！本当に嫌だコイツら。

「まさまさは、私のだよん」

ふと後ろから声が聞こえて振り返ると、しーっと唇に指を当てる女の子が片目を瞑っていた。

彼女、利野 裕理>としての ゆうりくの力は、彼女と彼女が触れたものの存在の認識をズラすという力。端的に言えば、他の人は俺と裕理の姿が見えなくなるわけだ。

「雅っ！どこにいるの！」

満がキョロキョロと視線を動かす。まあ、普通は見えないはずなんだが、彼女は心が詠めるからな。

「声はする。この部屋にいるのは間違いないわね」

声というのは心の声のことだろう。というかこの能力が効かないヤツが一人いることに裕理は気づいているのか？

「そこ。そこに雅はいる」

ほらみろ。綾知の真実を見極めるってのは嘘を見抜いたりするだけじゃないんだよ。

「任せてっ」

身体が動かなくなる。ショートカットのスポーツ少女。確か水泳部だったか？彼女、小夜森 和泉＞さよもり いずみくの能力は止める力。それはもう、流動する水とかから、目に見えない時間まで。コイツもまじチート。

「ばれてーら（死語）」

てへりと舌を出す裕理。・・・本当に何なんだろうな。この人外魔境空間は。

「とりあえずまー君が私たちをどうするのか知りたいな」

今まで沈黙を保っていた赤のカチューシャがよく似合うお姉様、大葉 七海＞おおば ななみく先輩が口を開く。彼女の能力は、ありとあらゆるものを魅力する力だ。まあ、何故か俺には効かないんだが。

「…………責任は、とる」

都合のいいことにこの世界は一夫多妻が認められているのだ。合法ハーレム。いいね。嘘だけど。

こんなヤツらと一緒にハーレムなんか作った日には、俺の命がない。三日も持たずに死ねる自信がある。

責任というのは、そーだな。アイス買ってやるとかでいいだろ適当に。

「それ…………本当？」

俺の発言に目を光らせてるのは元素を好きなように操れる能力を持った加賀美 千弦>かがみ ちづる<。明らかに中学生くらいしかない身長でツルペタ。付き合おうものなら、ロリコンの称号を賜わうレベル。ちなみにコイツの上目遣いは凶器だ。

さてさて、色々と收拾がつかなくなってきた所で残りの人を紹介しよう。

といっても最後の一人だ。我関せずと古ぼけた本を読んでいる眼鏡っ娘が、榎名 響子>なるな きょうこ<。かなり自信家なトコがある彼女。

ふと、「雅が私のことを好きなのは確定してるから」なんて呟く。

・・・おいおい。どうすんだこれ。なんか今にもバトル始まりそうなんだけど。

視線をずらすと、窓の外に尋^たち^の姿が。よし逃げよう。影と戦う前に死んでしまいそうだ。

俺は思い切って、宿の二階の窓枠から飛び出した。

最終話 終わり。そして始まり。(前書き)

リアルに今日が土曜日だと思っていました・・・休みボケって怖い

最終話 終わり。そして始まり。

色々町が半壊する程のトラブルがありつつも、俺はなんとか生きていた。

というか、よく半壊程度で済んだな……。もちろん警備隊なども動いたが、暴れ回る神の遺物>チート<保持者になうわけもなく、早々に全滅していたの言うまでもないだろう。

「大変ですね。雅君も。まあ自業自得ですけど」

彼女たちに見つからないように隠れている俺に、尋が話しかけてきた。

「……わかってるよ」

俺は小さくため息をつきながら返事をする。自業自得なのは痛いほどわかってるさ。

先ほどまで争っていた彼女たちは、協力しながら俺を捜しているに違いない。

尋はと言えば面白そうに俺の後を着いてきただけ。止めようとする素振りすら見せなかったからなコイツ。

それにしても、こうやって尋とゆっくり話すのはいつぶりだろうか。

瓦礫の影から空を見ると、茜色の空が妙にしんみりした気持ちにさせてくれる。

「影に、勝てるんでしょうか」

尋がぼそりと呟く。確かに俺たちが成長し、実力をつけたとしてもあの圧倒的な力に勝てる気はしない。

「勝てるか、じゃない。勝つんだよ」

あれ？今の俺ちょっと格好よくね？・・・まあ、勝つための術だ。対価は大きいけど、世界を救うための犠牲としてはちっぽけなものだろう。

その後も尋と話をした。今までの空白を埋めるように。気がつくとき空には星がキラキラと瞬いている。

「そういえば雅君。影に勝つための秘策っていったい——」

不意に悲鳴のようなものが聞こえてきた。頭に響くような甲高い音で。

瓦礫から外に出る。空に浮かんでいたはずの月が、半分真っ黒になっていた。今日は満月のはずだ。いったいどうなってる。

グオオオオオオオ——。低いうなり声が聞こえてくる。夜の闇が、さらなる黒に塗りつぶされていく。くそっ！予定よりだいぶ早いじゃないか！

そして空に浮かび上がる、膨大な数の赤。ヤツら、影の瞳が無数に輝く。

「さて、予想よりだいぶ数が多いですね。それにあれば」

「ああ。あんなでかいヤツ初めて見た」

一際大きく光る赤が、幾千の赤の後ろに数体浮かび上がる。

俺は大きく息を吸い込み、攻撃の準備をする。先手必勝に限るだろう。こういうのは。

「魔力補充＞チャージ＜」

唱えると、空気中の魔力がじわじわと身体に染みてくる。そしてその魔力を神の遺物がある目へと集中させ力を発動させる。

「捻れろ」

世界が、捻れた。遠くから無数の叫び声が聞こえてくる。今ので二、三百は消えただろう。しかしどこからともなく影はわいてくる。やはり後ろのでかいやつを潰さないとダメか。

「尋、これを」

俺は尋に、青く光るビー玉サイズの宝石を二つ渡した。

「一つは瑞希ちゃんに渡しといてくれよ」

そう言って、俺はポケットから魔法具を取り出し魔力をこめる。す

ると身体がフワリと空に浮かんだ。

「雅君！」

「大丈夫だったの。くれぐれも頼んだぜ」

あの術を使うのに、周りに人がいたら逆に邪魔だ。

それに犠牲は俺一人でもいい。ゆっくりと影に向かいながら、この世界に来てからのことを振り返る。なんだかんだ言って、楽しかったな、なんて。

魔法なんて未知の力にも触れられたし、友達も何人か出来た。つっても、ほぼ女の子なわけだが。

「届いたか」

俺が持っている、尋に渡した宝石よりも一回り大きい宝石が、淡く光り出した。この宝石は、神の遺物を持っている人皆に渡しているのだ。

これで全員の手に行き渡ったらしい。

盗魔石、それがこの宝石の名前だ。字のごとく、魔力を盗む石。それを旅の途中で出会った変なじいさんに頼んで、改良してもらったわけだ。俺が持っている石に、他の小さい石を通して他人の異能を盗むのがこの石の力。

「起動>スタート<」

ウィーンと機械音のような音を発しながら、俺の手の中の盗魔石が光り出す。その光から、尋たちの異能。神の遺物の力が流れ込んできて、俺の力と混ざる。

脳に負荷がかかったためか、鼻からツーツと血が流れてきた。

全ての力が混ざり、一つになる。果てに完成したのは虚無。

全てを無に還す力。

光る赤を睨み、小さく笑う。振るうは世界を改変する力。代償はただ一人の命。

「まあ、なんだかんだ言って楽しかったからいいや」

悔いはないと言えど嘘になるが、それなりに満足出来る人生だった。死にたいなんて思っていた小学生の頃に比べれば。

光が空を満たす。影の悲鳴が響く。呆気ないななんて苦笑するくらいには余裕があった。これで皆安心して暮らせるだろう。そこに俺がいないのは少し残念ではあるけどな。

力の抜けた身体が重力に従って落下を始める。キラキラと光の粒になって消えていく影たちは、とても綺麗だ。

まるで夜普通に眠るように、俺の意識は途絶えた。

☆☆☆☆

「やっぱりこうなった」

キラキラと空を舞う光の粒を見ながら、如月九は呟く。この未来は

知っていた。何故か彼がこのあと眠るように死んでしまう未来は視ることが出来たのだ。

こんな時だけ——と、唇を噛みしめながら九は風の魔法を唱える。何事にも無関心だった自分がこんなに焦っているのは彼のせいだ。この責任は取ってもらう。だから死なせはしない。

風をまとい移動する九。そして雅哉の異変に気づいた者たちが、彼の落下地点へと急ぐ。

皆が到着した時には、すでに彼は息をしていなかった。その身体を受け止めたのは、あれほど彼を嫌っていた三姉妹の長女。

九は泣きながら何か叫んでいる彼女や他の人を、わりと冷静な思考で観察しながら気づく。

自分の頬を伝う涙に。

ああ。泣いたのなんていつぶりだろうかと、苦笑する。不思議と涙は勢いを増していった。

世界は残酷だ。この世界を守ったのは彼だというのに、彼は命を失った。これがこの世界のやり方なのか。こんな世界の法則なんてなければいいのに。

とうとう、嗚咽まで口から漏れ始めた九は、自分の無力さに絶望する。

「世界の法則でいえば、死んだ人が蘇ったりはしないだろう」

声がして、皆の視線が集まる。黒いシルクハットを深くかぶった誰かが空に浮かびながらにこりと笑った。

「なら簡単だ。世界の法則を書き換えればいい。その力を、君たちは持っているだろう？」

そしてそれぞれが気づく。ここには、十一もの世界を騙す力があるではないか。そして願う。一度でいいから、世界の改変を。彼が死んだという事実を、塗り替えるのだ。彼が実は生きていたという事実。

パリンと何かが割れた。きっとそれは、世界の何かが壊れた音なのだろう。世界を騙す力を宿した神の遺物は、淡く光り、その役目を果たしたとばかりに崩れ去る。

そして世界は人の手によって改変された。

「さて、私はそろそろ去ろう」

寝ぼけたように起き上がる彼と、シルクハットの男は目があった。
駆け寄る仲間たちに色々と謝罪をしながら、シルクハットの男と雅
哉はもう一度視線を交わす。

「さて、この世界の神にでも挨拶に行くとするか」

シルクハットの男は空高く飛び上がった。

そして世界は、改変されたことに気づかないまま、時を刻んでいく。

最終話 終わり。そして始まり。(後書き)

ぐだぐだな終わらせ方で申し訳ない。思ったよりも就活がうまく行かないもんで・・・もっと色々書きたいことはあったのに・・・・。というわけでここにて完結にさせていただきます。急ぎ足で進めたのは本当に謝罪したいですはい。

就活が落ち着けばまた何か書くつもりなので、その時はまた拙い小説を読んでいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7353r/>

ないとof騎士

2011年9月25日13時45分発行